

遠方から

第三号

1975年6月10日発行

遠方から 編集委員会

松本礼二 責任編集

統一地方選挙と〈第三勢力〉の形成

「遠方から」編集委員会

「ポツダム労働組合」解体

編集部

—日本共産党の戦略転換—

ブントについて—(2)—

正木真一

日本国家物語 —講談「2・26事件」—

咲谷 漢



眞実をおそれずに、革命における社会勢力の相互関係を冷静にはかり、およそ、現状勢を評価する際には、現在の見地から評価するだけでなく、一層深い原動力、すなわち、全世界におけるプロレタリアートとブルジョアジーの、一層深い相互関係の見地からも評価する政治家は、このようにしか、ただこのようにしか考えることはできない

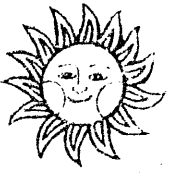
レーニン「遠方からの手紙」

遠方から

第 3 号 目 次

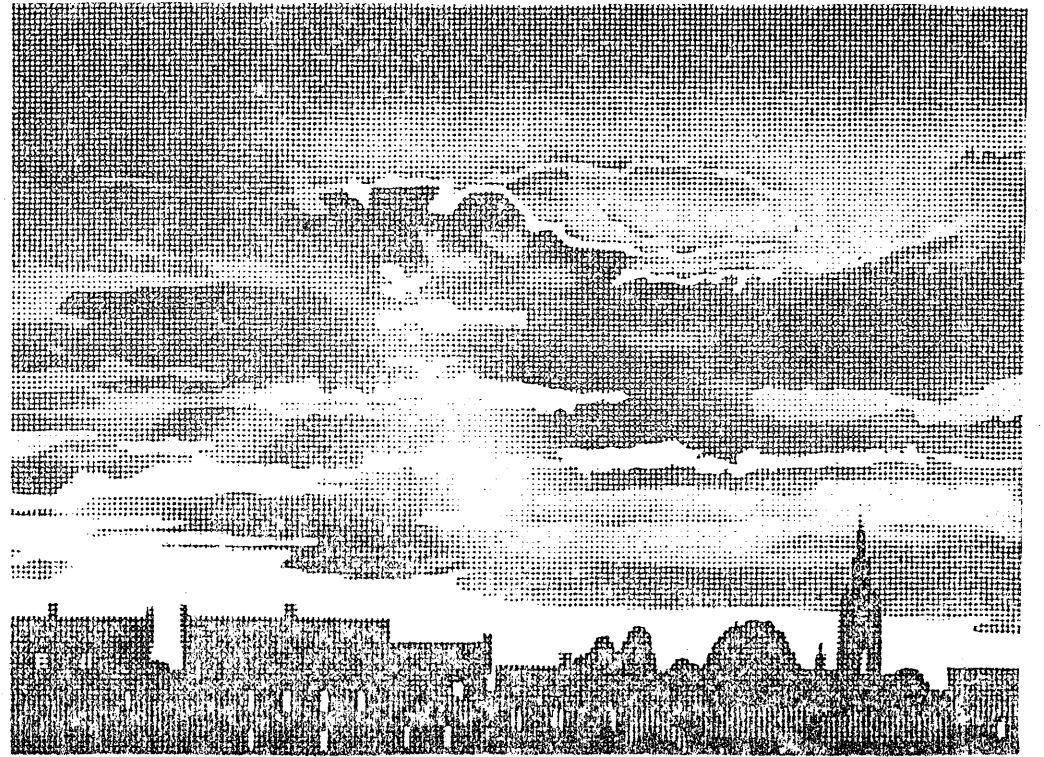
統一地方選と〈第三勢力〉の形成 ——ある政治実験に関するJ君への手紙——	2
「ポツダム労働組合」解体 ——日本共産党の戦略転換——	26
ブントについて (2) ——共産主義者同盟の〈青年期〉へ——	33
日本国家物語 ——講談「2・26事件」——	43





統一地方選挙と 〈第三勢力〉の形成

ある政治実験に関するJ君への手紙



「遠方から」編集委員会

1 様々な評価

J君

君とはじめて、この砂漠のような都市で出会ってから、もう何年になるだろう。そして、考えてみれば、君と何事か大声をあげながらこの大都市の街から街を走りぬけた日々は、今から考えればウソのように、ほんの短かい間のことだったとはとても思えないほど、あの「一瞬」の「事件」が僕らのその後の長い期間に影を落しているというのは信じられないような不思議なことだ。

あれ以後の君と僕との生活で、ほとんど、どのような意味での協同すらあったためしはない。

ない。しかし、この期に及んで、僕が君にこのような手紙を書かなければならない気持ちでいるというのは、一体どうゆうことなのだろうか。

このことは、ブントの問題に置きかえてみても同じことだ。ブント十数年とはよく言われることだが、多くの人々それぞれにとってブントVに接した期間は本質的に言って一年をそれほど越える期間であるというのは、ほとんどマ、ムツバだ。そればかりではなく、当然のブント自身、その十数年の歴史のなかで本当に動いていた期間の合計が歴史の検証にたえる意味で一年を越えると自信をもって言えるだろうか。

そんなことより、ブントは創生後のほんの一瞬をのぞいて、その名を称する集団が単数であったためしはない。

それにもかかわらず、大政党革新共同はいまだに幻のブントを批判するし、その影としての「解放派」を存在させ、そしてまた何回目かの「大ブント構想」が語られている。

僕らの仲を嫉妬する政治青年たちが、近ごろまた「ブント同窓会批判」をせざるを得ない、この変な仲とは一体何なのだろう。僕ら同志はたがいに嫌悪さしているとい

うのに……。

J君

「戸村選挙」反対派のチャンピオンとして世のシンジックを買っている有名な「遠方から派」の我々が、突如何を血まよったのか統一地方選挙にあちこちで手を出し、農村のドロとホコリにまみれて意気揚々と東京に帰って来た日の君の話をわすれることはできない。

僕にとって、君がどのような反応をするかは、実のところ大変楽しみでもあり、また正直に言って心配ですらあった。

というのは、我々が今年に入ってから、地方選挙に手を出すことを決め、そして実際に三月に入り公然たる活動をはじめると多くの友人・知人たちから文字通り様々な反応がまきおこった。それらのものがほぼ我々が予想したものであっただけに外ならぬ君からどのような意見が出されるかは大きな問題だった。

J君

やはり、君からの意見は他のいかなる者達の反応とも異質のものだった。僕はあの時、君の意見に対する明確なコメントをあえて出さなかった。それは、他でもなく、君の意見がサラリと言われたにしては、あまりの問題を含みすぎている行きずりのコピー店です

には僕にとって重すぎたからだ。むしろ、別際に僕が手渡した「遠方から」第二号をかざし「これを読んでからまた会おう」と君が言ったのがすくいですらあった。

君のあの話にふれる前に、多くの諸君が我々に対して示した反応を類型化してみよう。我々は、地方選挙の準備をしながら、まもなく大別して二種類の反応があることを想定した。

第一は、言うまでもなく、A選挙Vをやったこと自体に対する「反選挙派」としての転向ではないのかという批判である。我々は、いわゆる「戸村選挙」の動きが目立った流れになりはじめた機をとらえ73年8月（戸村氏立候補表明後ただちに）第二回全労活交流集会冒頭に、文書で反対の意志表示を行ない、続いて三里塚現地で論文を発表（咲谷・一条文書——後に「情況」転載）し、その反対の立場と理由を明確にした。そしてローテ誌上の正木第一文書、正木第二文書でさらに鮮明にし、選挙後「評価」が出ぬ前にただちに読書新聞紙上（咲谷論文——フォークス74）で「総括」を展開し、最終的に「遠方から」第一号（正木第三文書）で戸村選挙のくだらなさについては「選挙派」の足腰が立たぬまで

確定した。

事実選挙派は我々のこのケタタマシイ批判によって今に至るも総括らしいものは提出していない。

しかし、我々はこれらの度々の意志表明において、我々が「反選挙主義者」だというよりな立場をとったことは一度もない。従って左翼が選挙に手を出すこと一般に対して批判など一言も言ったことはない。むしろ、正木第三文書、読書新聞咲谷論文などでは、「選挙派」としての第四インター日本支部をゲキレイすらしているのである。

にもかかわらず、選挙派諸君は「自分達が選挙一般に手を出しても良いではないか」という、いい訳にもならぬグチをブツブツ言いつけているのである。要するに、カミナリオヤジにおこられている子供が、一体自分は何をしかられているのかわからないのと全く同様に、選挙派諸君は、「松本オヤジ」におこられている意味がよくわからないのにならぬ。

我々が主張しつづけた、「三里塚」に代表される暴力的住民斗争の流れを「選挙V」などに大団円させるわけにはゆかないということ、そして、その選挙たるや階級斗争としての政

治戦略に位置づけられる政治責任の取られ方が全くされていないという点に対する、わりとわかりやすい主張が全く理解されていないのである。何と、我々は、「ブルジョア的政治手段」選挙一般に反対するビューリタン」だと誤解され、「美しい孤立」をしているのである。

「清く正しく美しく」などない我々にとつて、この誤解は大変なことだ。そんなわけで昨年末あたりから「子供（小人？）を少しいじめすぎたかな」という反省（？）が我々の内でささやかれていた。

その我々が統一地方選挙という「窓」を通して、歴史的な政治実験を計画しはじめたとき、当然「反選挙派」と誤解されている我々に対する「選挙派」のとまどいも当然あることが想定されたわけだ。だから、この手の批判（？）に対しては「我々は選挙反対派ではないよ」と言い、そしてまじめな者には先にあげた六文書の学習をせよ、とさとしこにしている。

もう一つの「批判」のパターンは少しちがう。我々が出した諸文書の読解力はある程度持っている人々の批判だ。

最近、「遠方から」一派が、地方誌「東風」

このような二種類の批判をする集団に対しては、我々は今までどおりデストロイヤーとしての仕事をコッコツとまじめにやってみようというわけがあるまい。我々が、今、「食うために働らかなければならない」と全く同様に。

「遊び」でも「賭け」でもなく

J君

しかし、君が僕に対してあの時整理しながら話してくれたことは、以上述べてきた二つの立論とは全く別の内容だ。

君の立論は、およそ、左翼と選挙の長い付き合いの歴史をふまえたものだった。多くの左翼が「革命的議会主義」をとえながら「選挙V」を行ない、現在の共産党のように選挙にまで生長するというのも一つの典型だし、その他にも新左翼統一戦線としての浜野選挙、党派主導型の黒寛選挙、はるか昔の出陣選挙、中核・四トロに代表される「地方選」そして戸村選挙……とおよそ考えられる全てのパターンで「左翼と選挙」の関係は研究しつくされているはずだ。だから、今さら「遠方から」派が選挙をやったり、又は我々

の水戸の人々が選挙をやるのを許す真意がわからない。

にもかかわらず「遠方から」派が選挙をやるのだとしたら次の三つの場合のどれかであるとしたら（論理的には）評価の仕様がな

その第一は、「遊び」なのではないのかということだと思ふ。つまり、「遠方から派」という貴族集団の高等遊戯だとしたら理解しやすいという……。

そして第二は、政治的な新局面に立った我（つまり「地方論」と「第三勢力論」という新しい政治理論を持った）が政治利用の可能性を志向した「賭け」だったのではないのかという旨示だったと思ふ。この立場に立てば、批判として構改派バリの「新地方主義」に立脚し、全国大衆政党的形成を志向しなかつた日和見主義」という話があり得るし、また、そのラディカルな極からは、「保革体制破壊に至るまで選挙戦を徹底的に斗わなかつた日和見主義」という批判もなされるはずである。

最後の第三点目は、この「利用主義」に關連する立場をふまえ、「遠方から」派が、自らの利害をだいたいあんなに選挙にからめしかも、選挙自体にラディカルな戦術を持ち

に度々登場し、そしてその「東風」が「辺境」誌と一種の友好関係にある事実を見て、その三つをあわせ、「ディスカバー・ジャパン」連合だと誤解した人々のことだ。それぞれ立場もちがいが、ましてその「地方V」に対する出発点があるでちがう三誌をいっしょくたにするとは大変な構想力（？）だが、こう考える人々はたまたままじめな部類に属するが故に一種の悲劇性を見ないわけにはゆかない。

この悲劇性に「絶望」したある友人が、地方選のさなか「いっそまし、この三者にドラゴン・バットを加えて『辺境は北海道まで行かなくても、水戸や川崎にもあることを発見する運動』でもやろうか」という悪いじやうだんを言っていた。我々にとって「地方V」とはいかなるものか、については「遠方から」第一号・第二号をよく読んでもらってから論争するほがあるまい。

しかし、「現代を代表する秀才」であるモンガーや津村クン等々は、すでにいちちはやく「新地方主義」だとかの新語を作ったり、「第三勢力V」形成の政治工作をはじめていることに注意を向けおく必要がある。多分秋風が立つころには、「地方問題V」の花ざかりになるにちがいない。

込むのはファシストみたいだ、あるいは我々がファシストになったのだとすれば理解しやすい、ということだと思ふ。

このように整理してゆく君の話の聞きながら、僕は「さすがは君だ」とつくづく思ったものだ。我々がこの選挙のことに取り組んで以来現在に至るまで、これほど整理された話をまだ聞いたことがない。そればかりではなく、「反体制派」が「選挙」に取り組みしたら君の整理した三つの対応を軸にして考えるほかないだろう。

だから、僕はある時、ただ結論的に「ちがうんだ」としか言いようがなかった。おそろく「ちがう」ということを君に理解してもらうためには、君と同じ位、あるいはそれ以上整理された論旨を展開しなければならなかつたにちがいない。しかしあの時、正直言ってそのような論理的思考を進め、それをすぐ言葉にする状態に僕はなかつた。

我々が考えたある種の政治行動を、みなで分担し、僕自身その一端を引き受け地方に行つて後40日間動きまわり、それがようやく一段落し（いわば戦場から帰ったばかりの兵士と同じように）意気揚々とこの大都市に帰つて来たばかりの僕にとって、様々なガラスの

組成を実験室で何日もかかって、スペクトル分析して、ようやく終り出てきたとたん「カットグラスの芸術性が本当に一番高水準なのは、チェコですか、日本ですか？」と聞かれたようなもので大変面喰ってしまった。

実は、そのとき僕は「ガラスの強度は、常識的な成分以外に、A第三の要素Vであるストロンチウムが存在していることが決定的な要因であることが明確になった」という種類の話をしようと思っていたのだから。

要するに、選挙をやっていることをすっかり忘れていた僕は君の話におどろいたと同時に「あっ、そうか、オレは選挙をやった来たんだな」と思ったようにならなかつた。

もともと我々は、戸村選挙やその他の選挙一般のように「階級斗争の永い進路を行くうちに、さけてはならない課題である選挙にぶつかり、それに大胆に取り組」（戸村選挙綱領文書）んだわけではない。我々の現在の関心事は「遠方から」で度々どくと主張しているように、A地方Vであり、戦後保革構造であり、弱者プロレタリア群であり、農民であり、A第三勢力Vである。そして早急にそれらのものを実際にこの手でふれてみなければならぬ必要性にかられていた。

るごとに、この件は、報告書にはこう書いておこう」などという余裕など実は全くなかった。まじめな、お人良しの凡人でしかない我々にとって、そんなきれいなことがあるはずはなからう。

それどころか、僕らにとつての、この十数年はこのようにある意味でははじ知らずな、また、カッコウ悪い悪戦の連続の中から切り開いた「結果」を、後で色々A位置づけVることができたにすぎないこと位僕にもよくわかっている。しかし、そんな我々も、今よりやく何かやる時「今回は、せめてこの位のことを最低やってみよう」という程度のことを、あらかじめ考えることができるようになった、というのがA実験Vと言いたい我々の真意だと、せめて好意的に理解してくれ。

そのような意味で、我々は協同した多くの人々は気がついていなかったかもしれぬが、今回もいくつかの明確なあやまちをおかしかけた。例えば「A第三勢力V発見」に熱心なあまり、我々以上に表面に立って活動した多くのの人々を、A実験Vの水準を越えて（その人々のその後の諸活動を棒に振らせる形で）突撃させようとしたり、同じように、将来全国水準でA第三勢力Vの中核になるはずの政

それらのものを、分析し、観察し、定量する実験室は、たて前上どこに設定してもよいわけだが、政治的力量が弱く、「金力」の乏弱な我々にとつてなかなかそうはゆかずに実際困っていた。

ところが、定性的・定量的解析がそもそも非常にたやすい構造の、しかも国家権力が費用を負担し、しかもコンディションの標準化さえしてくれるゆめのような「実験室」がたまたまあったのである。それが、他ならぬ統

J君

こんな話が他にあるだろうか。百歩ゆずって我々のような貧乏人がそこで「政治実験」をやろうと思うのに不思議はなからう。だから我々にとつて、今回統一地方選挙に手を出したことは正確に言えばA選挙Vではないことになる。

先にも述べた「戸村選挙」をはじめとする多くの「〇〇選挙」が、この選挙をどう闘うか、という観点から出発しているのは全く対称的に……。

だから、それは「遊び」でもなく、「賭け」でもなく、ましてや「選挙」一般の中に入れられるものではないことが（少なくともその

治領域に手を出したい誘惑にかられ、やみくもに「ポスト地方選」の展望と無関係に「既成政党」内におけるある領域を解体しようとしたり、そしてまた左翼がおかしがちな一般的悪習の一種に属するような意味で、いわゆる「引きまわし階級形成論」、つまり、内的必然性や政治的な条件の成熟と無関係に、地方党を（準）の段階から飛躍させようとしたりということは実際にあった。

これを「政治的突出」というカテゴリー一般の中に入れてしまうのは、我々が当初考えたA実験Vという水準にたらず、あきらかに逸脱だと言うほかなからう。これらも、実のところA実験Vが、気持が悪くなるほどうまくゆきすぎた結果おこったことにはちがいが無いのだが……。

遠方から第二号で「大衆にとつて党などはその政策・戦術としてしかないものであって、もっと正確に言えば、われわれはそのような冷徹な大衆のみに依拠し、このような大衆だけを育てたいのだ。

大衆政治同盟の『大衆』とは日本の大衆のうちから形成される、このような大衆を指すのであって、『プロレタリア的』何とやらをちらつかすそこの党のデマゴギーにたぶ

ような意図は）部分的には理解できると思う。が、しかし、君が整理した類型の内に我々の「実験」が組み込み得ず、また意図だけではなく、その結果についても「やはり選挙ではなかった」と考えてもらうためには、僕もこの手紙の中で若干ふれるが、くわしくは「実験解析書」としての活動報告書（まもなく発表されると思う）を見て判断してもらったほうがよいと思う。

そして、それと同時に、A実験Vとはインプットに対応するアウトプットをあらかじめ想定したA仮説Vの有効性を証明するためにおこなうものだ、という今述べてきた側面のほか、必ずその途上予期し得なかつた第一のファクターが出現するという側面がある。我々のA実験Vもまさにそのような「公理」の例外ではなかつた。

予期せぬ出来事の連続

前にも述べた「実験解析書」をまとめようという気持ちになれたのは、あくまでA実験Vが全て終わった今の心境だと言った方がより正直だということは告白しておこう。だから、A選挙Vをやりながら、何か事件を乗り越え

らかされるような大衆ではない。（第二号編集部論文20頁より）のであって、そのような大衆との関係を考えない以上、不完全なA党Vが必然的に（永遠に）おかしかもしれない、前記のようなあやまち・逸脱を補おうすべし、「公党の無謬神話」のなかにしか求めようがないという岐路に、革命運動が常に立ち続けている傍証ですらある。

この事が、続いて述べられている「また逆に、このような大衆の批判に不断にさらされるという助けをかりて、党の戦術の真性を点検する以外にはないのだ。このような戦術——大衆のかかりこそが、党の私性を否定するのであって、党自らがその内部で自分は私的だ、公的だと自己規定してみたところで党の本来の私性を転質し得るものではない。党の私性はそのように根深いのだ。」（前掲よりの引用）という点についての実際の内容なのである。

レーニンが謎のように言い、その後の左翼がその時々ファクションとして利用する有名な言葉「党と大衆の緊張関係」とはこのようなことなのだ。

このようなこと、そしてさらには、たとえば日々おこる「マスコミとの闘争」「地方権

力との闘争」……という予期せぬ出来事の中でこそ我々はかけがえのない政治経験を蓄積してきたと言って過言ではなからう。

「石川氏はさておき」の意味

話しかわるが最近「石川氏はさておき、他の新左翼選挙は」と書いた「現代の眼」をまわって他の「新左翼地方選挙」の結果を「あていつたらくは何だ！」と我々は嗤う気にはなれない。「現代の眼」がひやかしたすべての「新左翼選挙」は、それぞれ文字通り総力戦だったのだ。多くの活動家諸君が、おそらく寝る間もおしみ全てを投げ打って取り組んでいるはずであることは想像にかたくない。我々が言いたいののは、この件でもはからずも左翼反対派としての新左翼歴史が終えんしたということに苦渋をこめて認めぬわけにはゆかないということだ。要するに、選挙においてさえ「革新の最左派」として行動した新左翼が、その革新本流と保守という、戦後保革体制の主力部隊に完敗したのだ。

同様に、「保守最右派」としてラディカルに正しい(?)問題意識から「石原なんていう小僧の何がファシストだ!」と言った大政

治家・赤尾敏サンも「保守主力部隊」(石原・松下)にみじめに完敗した。「眼」に「さておき」と評価(?)された茨城県知事候補石川氏と単純に比較してみよう。

茨城		東京	
竹内	四四万票	美濃部	二六九万票
海野(日共)	一〇万票	石原	二三四万票
石川	四万票	赤尾	二七万票
			一・二万票
			〇・二二%
			五八%
			四四%
			五八%
			七四%
			一七%
			七%

J君

僕は「新左翼」及び「ファシスト」赤尾にくらべ、石川は立派だというようなことを言うとしていたのではない。これらの人々の熱意にくらべ、我々の石川選挙Vはそれほどいばれるようなものではなかった。むしろ、茨城では「さわやかにやろう!」がスローガンとなるほど、一種の優雅さを呈していたのだから……。

だから、僕の言いたいのはそのことではないのだ。

こう言えば、もう君は僕の言わんとするこ

とを理解してくれていると思う。そう、僕がはつきりと確認しなければならぬと思っっているのは、第一に、現在政治を志す者が大都市Vにこだわっている以上不可避的にぶつからざるを得ない悲劇性についてだ。このように言い方をすると、もしかすると君は「お前は大都市Vから逃げるのか?」と言うかもしれない。まあ、それは別にして多くの「新左翼」の諸君——なかでもまじめな人ほど——はまちがいがなく、「自分は、そのような苦難の道しか大都市Vにはないからこそ、コッコツと都市の運動をやるのだ」と言うにちがいない。

も考えられない。

だから、我々が川崎をはじめとして、いくつかの大都市Vで手がけた「選挙」はちよつと他の「新左翼選挙」とはちがう。A地方Vの論理が一種の「防衛」であるのにくらべ、「解体されたA地方VとしてのA都市V」では、構造的な運動論理が、ある種の新共同性の形成という側面に照準が合わされなければならぬ。つまり、我々は、都市ですらそのような「政治実験」として選挙という窓を利用したとだけ言っこの問題はあとにまわそう。

要は、「資本制を代表する全てのものが集中する都市」だから、その都市からこそ手がけなければならぬ、という単純な立場に立つべきでない和我々が考え、そしてこの悲しむべき多くの諸君に言いたいと考えていることだけ理解しておいてくれ。

二番目に僕が言いたいのことは、——この点については「遠方から」No.1・No.2でくりかえし主張してきたことだが——「戦後保革構造」のどちら側に立ってカゲキな主張をとなえる政治運動を展開しようが、残念なことだがそれはしよせん保・革どちら側かの応援団にしかすぎない。そして、応援団はどのみち

主役たり得ず、また主役に代って「仕合」をすることができないのは、もうこの間いやと言うほど思い知らされてきたことを認めてもよいのではないかといいことだ。もちろん、僕はこのことを政治的プラグマティズムの立場から言っているわけではない。

もっとわかりやすく言えば、「保・革」がだめだから、A第三勢力Vでゆこう、という種類のファシスト・バリの乗り移りをすすめているのではない。A第三勢力Vという表現はあくまで大衆の政治同盟という表現とともに体制の支配階級化したその一部に組み付けられた「労働者階級」概念に代わる、革命にとって主体となる階級形成過程のあるメルクマルに、仮に冠した名称である。そして「気がつくべきだ」とは、「野坂フーテン選挙」的にしかこのA第三勢力Vを発見できない悲劇的A都市Vにどっぷりつかって、他に見る目、聞く耳を持たないまじめな多くの諸君へのショック療法のつもりなのだ。

今回の統一地方選挙に「まじめに」取り組んだ新左翼の諸君は、もう内心ではこのことによく気がついてはいるはずだ。

だから、「だらしない新左翼選挙」を一般的に馬鹿にしたり、話は少しちがうが、

「殺人鬼・長谷川英憲」の杉並区議高位当選させる支持者が都市にいてというウス気味悪さに気がつかない者の感情こそを嗤うべきなのかもしれない。

2

我々の《選挙》

J君

いま、我々がこの選挙に取り組んだことを、とりとめもなく筆のおもむくまま書いてきた。フィリングとしては、ある程度君の指摘・疑問に答えたことになりましたか?

しかし、この辺で今回A選挙Vごときにエネルギーをさく気になった我々の基本的な考え方を、君にもちゃんと整理して話しておかなければならないと思う。このことは、僕がA選挙VのためにA地方Vににかけてすぐ、出張の途中にわざわざたずねてくれたY君と現地で話した折、彼は僕の話熱心に聞いてくれた上で「君の話はよくわかった。しかし自分には恐ろしい感じがする」と言って帰って以来、時間を早く作ってキチッと君達に話

さなければならぬことだと思ひ続けていたことでもある。Y君が言う「恐ろしい」という理由は、君にも、もうよくわかるだろう。

地方選挙の政治的環境

Y君は、言うまでもなく我々とファシズムを結びつけて一種の危惧をいだいているのは説明を要しまい。

これは様々な意味で正しい評価だと思う。なぜならば、「遠方から」等を通じた（それらで表明した）我々の最近の状況に対する基本的認識の要点は次のようにまとめることができる点が、その危惧の条件の根幹をなしているからだ。つまり、資本家階級と共に体制支配の根幹をなす上層労働者階級（又は公企業・大企業労働者階級）主導によって「階級形成」された労働者階級一般の政治共同性を、革命派は敵視せざるを得ないとする階級感。つまり裏返して表現すれば、かかる階級関係の政治表現たる「保守構造」にとり込み得ない経済的・政治的弱者プロレタリア群の政治的共同性のヘゲモニーによる重層的新階級秩序を形成することが日本革命の第一歩であるという我々の思想は、一九二〇年代のヨーロッパ

における上昇期のファシズム思想の状況認識にほぼ一致するのは、まぎれもない事実であるのだから。

そればかりでなく、その上昇期のヨーロッパファシズムを我々はまたはつきりと一種の革命派であるという評価をする。

「A都市Vの百貨店が、はでで頹廢的なぜいたく品をショーウィンドにさらべたてて女たちを誘惑し青年がブレスレットをつけ上品な指輪をはめアイシャドーで目をかざり女のように腰を振りながら街を歩くと、一部の女がウーマン・リヴのときの声をあげフリーセックスが各方面で討論され、強くなった女が「結婚は売春である」とののしるるとき、ジャズがやはりボルノが家庭にまで侵入しホモがあらわれ、一方では男まさりの女がさばるとき……」

そんなときこそは、民主主義が危機に直面しているときであり、一撃を加えなければならぬときである。

A・ローゼンベルク「廿世紀の神話」というA体制Vを防衛しようとし、そればかりではなくその体制権力にしがみついた社会民主主義（マルクス主義）にあきらかに反革命であり、資本家階級とこの「社民」を打倒す

る革命を志向したファシストはそのかぎりであきらかに革命派であることは自明である。引用したA・ローゼンベルクの文章がまるで転写されたような現下の状況の中で、このように言う我々を、ファシストと結びつけて危惧しないような「政治家」は政治にかかわる資格のない政治オンチか、又は低能でなく何であろう。

ところが、実際は、我々のことを最近走資派と名づけた「夕駄（ユウゲキ）派」をはじめめとしてほとんどの左翼は、このようなおそろしい事を認める勇気を失ない「せめて資本家の手先程度でとどまっていた下さい」と言いたげでさえある。政治の表層に「手を出す」人々の中で、わずかに我々を「正しく」評価し、ファシストに乗り移り（？）はじめたのは我々の昔の友人平岡正明タン位のものだ。

J君
このように一九二〇年代のイタリアをはじめとしたヨーロッパと、おどろくほど類似し、しかも、鋭い人にはファシストと決めつけられても止むを得ぬようなことを部分的にであれ我々はなぜ考えるに至ったかを、実はもっとも君に話したいのだ。

我々の言う「保・革体制」なるもの、一般

には「戦後民主主義体制」という言葉の中に十把一からげでまとめられる現体制は、それなりの国民的運動に支えられ完成してきたという重い歴史を持っていることを忘れてはならないだろう。

「遠方から」二号でも詳しくふれたように平和と民主主義というイデオロギーは、たしかに戦後のこの国の民衆のA国民的禁欲主義Vの根底的理念として形成されてきたものである。別の言い方をすれば、民衆は、ある意味で「平和と民主主義」のために食うものも食わずにがんばって、このA栄光の時代Vを創りあげてきた、としてもあやまりではない。

一つのイデオロギーが、A時代Vにむかえられ、形成されるとはこのようなことを言うのではなからうか。それは、何も最近のことばかりではない。「富国強兵・文明開化」にして、「鬼畜米英」にして、「平和と民主主義」と全く同様な関係をそれと体制・民衆・階級諸関係……の中に形成していたことは論をまたない。そして、そのイデオロギーが有効であるかぎりにおいて、そのイデオロギーの重層的・政治的共同性を原点にして国民的禁欲を、体制は民衆に強制することを無理なく遂行し得るのだ。そのよりの意味で、戦後

永いあいだ「平和と民主主義」が保・革相方の側で国民運動のイデオロギーたり得たのである。かかる政治的共同性次元でのモチーフを社会的・経済的水準のA運動Vに訳すことをA行政的政策遂行Vだと見ておけば、戦後のいくつかの時代的結節点ごとにおこった国家の「反動政策」提起と、「革」の側がその都度「政策反対斗争」を展開し、結果として、その茶番劇がすぎることこのA栄光の時代Vが完成に近づいたことの本当の理由又はナゾが解けるのではなからうか。

そして、「政策反対斗争」に打率〇に近い負け方をしてきた「革」からのこの体制下における「保守逆転」が近ごろ話されるといふのは、不思議なことだとも言えるが、実は、国民運動の基礎に立脚しつつA体制Vの完成に奮闘してきた革新であってみれば、ごく自然な（有資格だという意味で）帰結でもあるだろう。

そのA政策Vを「なだらか」に展開しようという現在の国家の意図は、完成又は終末に近づいた現在の保革体制の行きつまり的ムーブメントを正直に表現したという意味で、充分に理解できるものではある。しかし、「なだらか」にやりたい福田は、何か決定的なことを忘れ

ているのである。言うまでもなく、それは政策実行にとって必要なのはA運動V的ダイナミズムである、という件だ。

しかし、福田にとってそれは無理な相談だろう。彼は、大戦末期の個人的体験から、政策を冒険主義的に遂行することの恐ろしさを良く知っている。「醒めた人」であってみれば当然のことだ。このこと自体はそれほどまじがっているとは言えない。

注・福田は大戦末中国の日本軍カイライ南京政権に、日本政府から経済コミッサールとしてついでいた経験を持っている。その時別の目的で金レートをいじるといふ冒険を体験し、十対一位の割合で優位にあった南京政権側が、あつという間に民国側にまけてしまい、それが原因で政権は一瞬にして消滅してしまつたという「原体験」を持っている。

だから、彼にとってインフレの恐ろしさは他の政治家にくらべ別格である。

しかし、この件として恐ろしさはインフレなのではなく、ましてや冒険主義が真因ではなく、国民運動という基礎をなくした政権が必然的に招来せしめる結末だということの方に気がつくべきだったのである。

福田とは悲劇的な男ではないか。30年ぶりに「国事」に手がとどく位置にたどりついたと思つたら、そこは前の時と同じようにある体制のたそがれのさ中であるという……。福田の言う「薄日のさす」時期は一体どのようにしておとされるのか、という点は我々にとつても興味をそそる。

悪循環を逆手に取って「成長政策」によるゆきづまりは、新たに強成長を提起し、国民をコブするしかない」というラディカル・ケインズ派的田中・大平の革命的冒険主義とのコントラストはみごとなものだ。

J君

僕は、保守政権のたそがれについて言っているわけではない。もちろんA政策Vを保守アベックによる「国民運動」「国民的禁欲」という追力のセメギ合いによつて遂行できないこの「戦後保革体制」そのものたそがれについて言っているのだ。

このような終末のとき、一部の組織労働者階級やエリート労働者にA階級V代表を僭称されているプロレタリア群や・工業ブルジョアジーに歴史というオノで切りたおされようとしている農民をはじめとする多くの弱者にとつて、そろそろこの体制（戦後保革体制）

に対する統合幻想が失なわれてきている事実が、何よりもA政策Vの迫力を失わせていることはまちがいない。だから、今春斗のように「なだらかな解決」という低位平準化的決着をつけるA政策（？）Vが「保革」主流によつて強引に実現させられれば、その喰い逃げの本質がかえって浮きぼりにされ、ますますこのA栄光の体制Vは民衆にとつてとらえどころのない疎遠なものと感じられてくる。

そして、多くの革命派（？）は、この危機をラディカル革新の立場から切り込もうと続け、結果に対してはいかかわらず「国家権力の反動化」と「革新主流の裏切り」という凶式を対置しようとする。これでは不毛だ。そればかりではなく、革命派II新左翼は真の意味で民衆の敵とならざるを得まい。近ごろは「行動だけは一番カゲキ」というカンパンすら返上しはじめている。多くの党派が、「労働運動内部で力を持つにはカゲキではだめだ」「言葉使いはデス・マス調で」と言うに及んでは、何がなんだかわからなくなつてしまふというものだ。逆に、一方ではカクマル派のように、その立場に立つて着実に喰い逃げ労働者階級主流の一角に巨大な地歩を固めつつあるという事実を見ると、我々が言うまでも

なく、左翼の相対的位置を理解することができよう。

左翼とプラグマティズムの関係についてはある程度目をつぶつてもよからう。しかし、それはあくまで「革命的」であるかぎりにおいてだ（それとて、あまりほめられた話ではないのは当然だが……）。ところが、何が革命なのか、民衆がみづからを解放することを射程に入れた政治的共同性を形成するにあつてあるがままの階級的な政治共同性をいかにA革命Vしてゆくのかわつていく視点を度外視したそれは、自民党の階級性と何も変ることはない。我々は、このような左翼（労働者階級のアブリアオリな階級的利益代表）一般は、自民党と同水準の政治の素材という与件に加えておくだけのことだと考えるに至つた。度々言うように、我々はむしろこの保革体制に組み込まれない老大なプロレタリア群の立場に立つことを通して以外革命の問題を考えることができなからである。

保革体制が完成に近ずき、そして階級諸関係が終末に近ずいているからこそ、この保革エスタブリッシュメントは存在をかけてA体制Vに目を向け、保革に大衆的政治幻想をつなく演出をしなければならなくなつてくる。

言うまでもなく、それこそが「選挙」であり「春斗」なのである。選挙や春斗で「保革階級対立」という幻影を演出することができれば、そのかぎりにおいて国民を保守・革新のどちらかにつけることを強制し、二分することが可能であり、同様にそのかぎりにおいて「戦後保革体制（戦後民主主義）」は安泰なのである。

みるがよい。だからこそ今回の選挙をふくめた近ごろのそれは「保革対立」「自共対立」がけたたましく強調され、保革協同で「保革逆転」の危機が演出されるのだ。だからこそ高成長期の一時期（他に階級・国民統合軸が明確に存在した時期）あつたマスコミが「保革」対立を抑制するというようなパターンは近ごろないのである。そんなことをしたら、元も子もなくなつてしまふからだ。

選挙という「窓」・「政治実験」

このような「目」で今回の統一地方選挙を見るかぎりにおいて、ホウマツ候補以外の政策・公約がみなどれも同じで、しかも、にもかかわらず「保」と「革」が強調されるイデオロギー的・「思弁的」選挙がくりひろげら

れたことの意味がよくわかるだろう。

だが、このようなA体制Vの意図と努力にもかかわらず、ほかならぬ今回の選挙の主役を形成した構造の中にすら、知らず知らずのうち「保革体制」を崩壊せしめる様々なフアクターが生まれてきている。第一は、本質的な意味で保守系無所属・革新系無所属がその政治的ギマンの枠を越えてしまふような、いわゆる政党かくしが進められてしまったこと。このことは、第二の特色である候補者自身、そして支持勢力の構造の無原則性という側面とも関連してくる。千葉県知事選・大阪府知事選などは「革新の大義」「保守は我が方」とけたたましく進められたが、実際にはもう「保革」の秩序は崩壊しているのである。しか言いようがない。佐賀県知事選で、革新であったがゆえに敗北した文字通り革新のホープ井出以誠氏ならずとも実感として理解できるだろう。

この様に国民は、よくまあこれほどまでの政治的虚構にだまされるものだ。いや、こういう言いかたは少し本質をとりちがえているのかもしれない。本質をすてに体で知つていて要認するものだ。と言いかえておこう。だが冷静に観察してみても、投票という行為が直

接利害（たとえば投票の日当）又は生活利害（組合・業界事情）などによつてしかおこなわれず、直接それと関係のない選挙の投票率が極端に下がるといふ形で、すでに国民は答を出してしまつていられるかもしれないのだけれども……。

J君

このようなA選挙Vをめぐる政治環境を、君はどのように見ますか。本当は「現時点における一般的政治的勢」といったほうがよいのだが、それではとらえどころがないし、また、いま述べたように「戦後体制」の中核・保革がそろつて国民統合軸を選挙に求めている現状をふまえて、あえて選挙という「窓」から見える政治環境を問題にするのだけれども……。

この際「オレは政治をやるうとは思っていないので、オカドちがいだ」などとヤボなことを言わないで、僕とともに、このウズ気味悪い政治環境の推移をながめてみるのもムダだとばかりはいえないのではないか。

体制が、春斗に代表される社会的位層の「祭儀」とともに、あきらかにA選挙Vを保革相方からの国民統合の「場」として設定し、あらゆるところをそこで展開することに熱

心である以上、そこには必ず彼らが「予期」しない様々なハプニングがおこるはずだ。また、このような意味で戦後30年を通じ、今ほど八選挙Vが大がかりに、またあらゆる政治・経済・社会的ファクターがからめられて行なわれることがなかったはずなのだから、この選挙という「窓」をとおして、それらのもをよよく見てやろうと我々が考えるのは別に不思議ではなからう。

また、同時に我々は、それとは別にある種の政治流動の「確認」をしなければならぬ必要にせまられていた。

我々は、この数年「大衆の事業としての革命構造の形成」、つまり新しい視点に立った階級形成概念の確立に向けて努力してきた。第二次同盟の最終分裂（叛旗派と我々の決定的分裂）を含めたこの間の様々な党派斗争、ならびに論争はそのためのこそあったのは言うまでもない。その、階級形成戦の主体となる様子を仮に「大衆の政治同盟」と呼んできた。

そして、この一年と少しの期間、大衆の政治同盟がいかなる階級関係の条件下でいかなる階級的ファクター（又は勢力）に立脚しなければならぬのか、という新しい課題を設

定し追求してきた。それらを「戦後保革体制」「労資食い逃げ」「労資階級同盟」「弱者・プロレタリア群」「地方共同性」八地方V「八都市V」「第三勢力」……という様々な評価の定まっていない概念を仮に提起することによって表現しようとしてきた。

以上の、数年にわたる嘗為の成果としての「大衆の政治同盟」概念、そしてその後の努力の中間表現たる八第三勢力V問題をはじめとする一連の階級関係ファクターについて、その両方の存在と、存在の仕方を何とかしてこの目で確認したかったのである。しかし、新聞の三行広告で「求む八第三勢力V」とやるわけにもゆかず、左翼の伝統的悪習を習って赤尾大先生の「第三勢力運動」をやったってしようがないと思っていたところだ。ところが、ほころびはじめた保革体制を何とかするために、より一層のホコロビが生じるとも知らず無理に集中統合をはかろうという意図ではじめられる、この八選挙Vにおいてそのほころびを外から「定性分析的」にはなく、実際にほころびに接しながら「定量分析的」に測定し得るとしたら我々の「念願」はある程度満たされることになりはしないだろうか。

そして我々は昨秋からこの方法についての八研究Vをはじめたわけだ。一番望ましいのは、もちろん八第三勢力Vが客観的基礎をバックにしながらダイナミックに登場し、それが保革体制両派を革命的に解体し、そのことにエントローピーを与えられた八大衆Vが雪崩をうって八政治同盟Vを無数に創りはじめるといふ「本物」の現場に我々が居合わせることだ。しかし、これは夢にすぎない。であるからこそ、我々はそのように本物に近いもの、または「本物」のプロトタイプである事件を通じてこの目で八第三勢力Vの諸相を見たいと思っているのだから。しかし、かといって、すでに我々が立てているこの八仮説Vそのものの次元と同水準の図上演習的オフJTをやってみたところで意味がない。

だから、我々が立てた方法的根本は、「ニセ物」であるという本性を持ちながらも、あくまで現実的根拠という要素に全てがウラ打ちされた一種の「本物」を舞台にした八政治実験Vに取り組むほかならうということになった。しかも、大きな制約となることは、八実験Vの材料とされるなま身の人々の、みずからよって立つ根拠と、その階層的・集団的利害を逸脱させるというあやまった政治的

利用主義の性格を持つてはならない、という一点についてである。八実験Vは「ニセ物」という本質を持ちながら、このような面からも制約としての「本物性」が条件づけられたわけだ。

結論的に言えば、このような観点で今次統一地方選挙という「窓」から、第一に、八第三勢力Vを現認し、第二には、その諸政治特性を知るための政治実験を展開することを決めた。「統計」という近代合理的技法の原則から言えば八都市Vの典型例数件、八地方Vの典型例数件、合計十件くらいの「実験」を手がけなければ整合的（客観的）データの整理ができないということになるのだろう。しかし、我々は何分力が弱いし、またそれよりも一刻も早くとにかく「実際にやってみよう」と思っていたので都市・地方ともごく少数例を手がけることにおちついた（それでも努力だけは十件以上やってみただが）。

かくして、昨年末から我々のもしかしたら他人からは手前勝手しか見えぬかもしれない説得が何ヶ所かではじまった。

我々がやったことを君に言うまえにことわっておかなければならないことがある。それは今なげなく書いてしまった八地方Vと

八都市Vという区分けのことだ。我々の常識からすればそれは当然のことなのだが、大事なことなので区分けする理由を言うておく。くどくどは君に言う必要はないと思うが八都市Vとは解体された八地方Vだと考えている。その解体のされ方は次のような型で露呈することもある。

もう、二年ほど前のこと、茨城県の鉾田町で山口武秀さんの指揮のもと、一つの政治実験がおこなわれた。それは八地方Vの小さな鉾田という町で町長と自治労の猿芝居が年一度行なわれ（春斗）自動的に町財政が喰い逃げされる、という素材を元にかんたんな何枚かのピラで住民に対する工作を行なった後、大衆的「烽起」の圧力によって町長に代表される町政を解体し、自治労を粉砕するという事件である。

この事件は、後に「鉾田方式」と名づけられしばらくひっそりとある種の政治工作者によって全国に知られ、人知れず「保守派」地方政治家に研究され、そして今はやりの「住民運動による地方財政問題介入」運動にそのまま持ち込まれるのである。君もよく知っているとおり、「鉾田方式」は八地方Vでおおむね成功しているが、八都市Vではほとんど

問題にならない。八王子、立川、川崎の保守派によって熱心なためされたが、最後には自治労と共同で「国庫補助」を要求する運動に集約されるしまつて、お話にならない。

これは八地方Vの工作者が優秀で、八都市Vの工作者がだらしがなかった結果などではない。八地方Vでは、まだ村・町という自治体が住民のものだという実感があり、地域共同性をバックに持った倫理性をあらゆるものに要求するということがまだ常識なのである。だから、喰い逃げ阻止のため住民の直接行動が生活論理の内から直接生まれ得る。ところが八都市Vでは、仮に美濃部が公費で妾をやしなおうが、芸能人のスキャンダル以上のものとしては見えないのである。行動があるとなればある種の階層のスペキュレーションな政治行動にしかならない。現に、川崎……ではその直前に（そうやっては何の政治的意味も持ち得ないので）、「国庫補助」要求という全く関係のない方向にそらして「客観化」したのである。

このように、八地方Vと八都市Vでは、ある共通の問題に対する政治諸関係の発生相が全くことなるのである。八地方Vでは、左翼（ばかりではなく叛逆者・反体制派……）が

古来持っている斗争の方法論を「共同性の防衛」という形式にオーソドックスにまとめやすい。しかし、A都市Vでは逆に無い共同性（つまり新しい共同性）を形成するという様に接点を持たなければ、芸能界風のキャンペーンしかおこすことはできない。これが両者の運動の根本的ちがいであり、A都市V運動の困難さでもある。なぜならば、単純に共同性を形成する運動と言っても、そこに常識的に考えられるのは、今世紀に入ってからアメリカで大衆反乱がおこるたびに「挫折後のコミュニティ運動」が発生するというのと同様のパターンになるか、あるいは「僧院共産主義（ユートピア）」運動を想定するしかないからである。

ともあれ、我々はこのようなA都市VとA地方Vの根本的相の差を前提にして、別々の視点でこの政治実験にとり組んだ。

3

我々の《仮説》と《第三勢力》

我々は、このようにしてA地方Vにおける

課題を共同性の防衛、復権に置き、A都市Vでは共同性の形成に置くことを明確に設定してかかることにした。

昨年末から今年初頭にかけて、我々は茨城をはじめとするいくつかの地方でA第三勢力Vの問題、保革体制解体問題という政治的志向に結合し得る型で、共同性の防衛という課題を結びつけ行動に移すための試行錯誤・暗中模索をくりかえした。そして、どこか一地方で保革図式を飛び越えた論理で「保革対立」構造をつきくずし、A第三勢力V候補を当選させる選挙をおこなう。それを仮に「〇〇独立共和党（地方党）」と称して多くの人々に説得をおこなった。

また、A都市Vでは共同性の形成という課題を選挙に（市議次元）からめ、一切の高等な政治統合し、住民の直接的物質利害に選挙そのものを引きつりおろすための様々な「住民運動」に対する工作をはじめた。

当然のことながら、我々の強引な工作は多くの人々のヒンシュクを買ったり、主体的に自立した多くのA大衆Vと様々な対立やギクシャクしたものを生みだし、三月末までほとんどその緊張関係がおさまることはなかった。そしてまたもや、左翼としてのかけがえのない

い友人たちが我々から離れていったりした。ただ、今から結果的に言うると、自尊心の強いドウモウなA大衆Vが友人として残り、A政治家Vである多くの古い友人が離れるという自然の淘汰がおこなわれたことになってしまった。

我々の仮説と実験の方法

我々のA仮説Vを一言であらわせば「現在・保・革に組み込まれない、政治的A弱者V群が存在する」ということにつきる。従って、それを主題とする政治実験の目的は、「政治的A弱者V群の現認と、その過程での実践的経験（訓練）」である。

その方法は次のとおりである。即ち、A第三勢力Vという政治概念の提起による。そのかぎりにおける限定された刺激を不特定多数の弱者群に与えるという方法だ。

注・ただし、川崎では直接A第三勢力Vという単語が使われることはなかった。大政同義の過程で間接話法的に表現されることになった。その可否・結果については直接たづさわった諸君から発表されるレポートによって後づけられるはずだ。

ある。

茨城においては、A第三勢力V問題の政治工作にあたっては石川次郎氏が「つめ腹」を切る形で自分自身で立候補（知事）せざるを得ないはめになったり、川崎では協力してくれていた多くの新左翼系諸君が「本場の弱者は寿町ルンプロの方だ」としごくもつともなことに気がついてバタバタ脱落したり……とにかく多くのハブニングを経て、我々の政治実験ははじまった。

J君
このようにとりすまして書いているとキレイごと聞こえるかもしれないが、実は、A実験Vは全部終了するまでの間たえずA実験Vのわくを逸脱してしまいう危険がつきまといいたことは想像できるだろう。この点については手紙の前の方で述べたとおりだ。

たとえば、「戸村選挙派」の人々とおなじように、選挙↑↓大衆（マス）という構図（つまり選挙そのもの）に我々自身をおとし入れる可能性を常に持っていたし、それよりもさらに現実的だったのは、あまりにもA実験Vの手ごたえが大きすぎたがためファシストのように「大衆のA第三勢力Vパニク」による保革体制の破壊」という政治突出をもて

あそぶ道に我々をして向わしめる危険性を日にかいまみせた。事実、この二種類の逸脱にまよい込むかもしれない動揺を、我々は一度ならず経験した。

このような意味でも、我々は実験の第二の側面、つまり政治経験（訓練）という点でかけがえのない貴重なるものを獲得したということと言えると思う。

話をもとにもどそう。政治実験としての選挙は概略次のように進められた。

A茨城Vは、新しい国民運動としてのA第三勢力V戦略にとっては典型的な「選挙主導型」であり、このためA実験Vとしての意味はとりわけ明瞭である。

この地方には現地に根ざした、新しい大衆運動の「実績」はなく、「候補者」の大衆にたいする政治経歴の点でも同様であり、A選挙Vは突如としてA地方Vへ舞い降りたのであった。しかし他方では、地方全般に共通する現状に加えて、この地はA地方Vとしての様々な政治的特性（右翼、農民運動、旧日共茨城県委等々の伝統）をもっており、選挙はこれらに対する直接的刺激となり得ることが予想できた。

このような条件のもとで、A第三勢力Vの

代表を公称する「地方党結成準備委員会」が誕生し、その推せん知事候補者・石川次郎氏が「A地方Vの復権」をとらえて立候補したのである。

A川崎Vこれと大変ことなり、地域における政治上の位置と新しい大衆基盤を前提にしての選挙であった。ここでA実験Vという意味は、典型的な都市大衆の地域での新しいタイプの住民組織形成（新しい共同性の形成）という点におかれた。

選挙は、だからこれに参加した大衆に自己の政治性格を知らしめ、大政同義A地方V形成へむかわせる手段であり、他方ではこの運動圧力により地方政治に介入することであった。だから、A選挙V（後）は直接的に「地震」を軸にした大衆決起につなげられてゆくはずである。という設定だ。言うまでもないことだが、川崎における「直下型地震」というファクターは、皮肉なことに、失なわれたA都市Vの民衆共同性を回復するはたらきをしている。これは、関東大震災後に朝鮮人を殺した「住民共同性」の、事前に出現するという型でA健全Vに生みだされた（？）新しい共同性の環だ、と言えばファシストまがいの話になるが、ともかくこのような左翼の

茨城県知事選得票の移り変り

<第5回>	38.417	77.64%
岩上 二郎	816,388	(興・社・自)
宮田 裕信	49,581	(事件屋右翼)
沼田 秀郷	45,184	(共産)

<第6回>	42.415	46.49%
岩上 二郎	532,810	(興・社・自)
大塚 正	41,646	(共産)
飯島新太郎	6,402	(ホウマツ)

<第7回>	46.411	53.61%
岩上 二郎	485,548	(興・自)
石野 久男	226,311	(社)
高山慶太郎	26,381	(共産)
山田 健二	18,152	(事・右)
飯島新太郎	6,180	(ホウマツ)

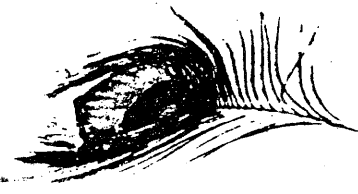
<第8回>	50.413	
竹内 藤男	441,231	(無新)
		(自推薦、民支持)
海野みきお	106,821	(共新)
石川 次郎	40,485	(無新)
新堀 恵	5,740	(無新)

ここにかけた茨城知事選の歴史的データと今回の全国知事選のデータは主として日共と<地方党>に焦点をあわせた。



知事(今回)確定得票

<長野県>			
当	753,474	西沢権一郎	無保現
	286,253	村沢 牧	無革新
	131,532	宇留賀行雄	共新
<福井県>			
当	344,510	中川平太夫	無現
	72,446	牧野 藤宗	共新
<和歌山県>			
当	465,523	大橋 正雄	自現
	126,342	米田 実	共新
<島根県>			
当	237,730	恒松 制治	無新
	232,013	山野 幸吉	無保新
	18,970	宮田 安義	共新
<大分県>			
当	376,501	立木 勝	無保現
	277,479	田尻 一雄	無革新
	33,100	堀 仁	共新
<宮崎県>			
当	443,277	黒木 博	無保現
	126,326	山口 靖	無革新
	31,616	坂田 実	共新
<鹿児島県>			
当	645,304	金丸 三郎	自現
	179,617	川原新次郎	無保新
	73,542	久留 義蔵	共新



△第三勢力Vと我々の経験

実験という意味は、△仮説Vを証明するための場を設定し、そこにインプットを入れ△仮説V通りのアウトプットが出てくるかどうかをたしかめる外にもう一つの意味があるということは何回かもう述べてきた。

それは選挙を経験すること、つまり△選挙Vそのものの実験である。△地方Vの地縁共同体と△都市Vのポツダム型民主組織を基盤とした戦後の△選挙Vは、今明らかにその性格を変えつつある。

我々が昨年野坂選挙に注目したのは、実はこの点にこそあり、一口にファシスト型の選

常識から規定すれば「没階級的」な与件によって共同性が回復されるという△事実Vに注意を向けておく必要がある。

J 君

このように我々の考えたことを説明してくれば、我々が△実験Vと言うことの様々な側面を少なくとも理解することはできるはずだ。そのかぎり、我々がやったこの△試みVと「選挙」「諸け」「遊び」とを区別しておいてくれないか。

挙利用が昔話ではなくなっているのではなからうか。東京における赤尾大先生の「生氣あふれる復活」、毛派ファシスト「マル青同」の登場もあるが、なによりも日共の選挙党としての純化があり、この点は八回大会路線のたんなる延長ととらえてはならない。

※ポツダム型組織の否定……春斗に注目

部落差別選挙……… 関西

我々の茨城選挙運動は、その内部より見た場合、以上の点をまさに具体的に経験した。「有力候補(?)」の一人に列する限り、彼が誰であっても民主主義はあげて彼の△選挙V運動を支援(?)する。さらに、地方の選挙運動は——ポツダム組織の媒介を捨てざるかぎりにおいて——無形の大衆の飢餓と直接接触する点で、また体制の破壊を挑発し得る点で、ファシスト型の選挙運動にすることが、技術的には可能なのだ。否、このための技術開発のために選挙は文字通り「利用」されうると我々は考えている。この手のことはまだまだ数えきれぬほどある。

従って、今回の選挙は、選挙そのものとして、そのデイトール(「革命的議会主義の原則」からすればこまごまとした雑事にしかすぎぬ経験)こそが実は重要だったのであり、

我々はこれを細大もらさず報告し、一つの実験マニュアルを作る必要がある。

その目的は、現在の選挙(都市でも地方でも)の新しい性格をこのデイトールを通じて明らかにすることであり、さらに、ファシスト選挙に対する歯止め(節度)は選挙それ自体にはないことを肝に銘じておかなければだめだと思つて思っている。

たとえば、現実に「報道機関制圧」「警察の物理的無力化」「巨大な反対派(自・共)の制圧」「特定都市の暴力的支配(?)」というような、ファシストしかできないと言われていたことがたやすく(?)できたという経験は様々な意味で貴重であった。

このようにして、我々にとって、今後の選挙は選挙自体に対する闘いになってゆくであろうと思う。

J 君

話が△経験Vについてばかりになってしまし△アウトプットVについての報告も少しはしておかなければならない。

結論はかんたんだ。先にまとめた我々の仮説はまさに正しかったのだ。要するに△第三勢力Vは存在していたことが少くとも選挙結果にもあらわれてきた。ここにかけた新聞

話がある。

の切り抜きを良く見てくれ。

政治的弱者A第三勢力V代表A地方党(準)V公認の茨城県知事候補者石川次郎氏は、今回の全国知事選で同一条件にある共産党の水準をほとんど越える得票をおさめ、茨城においては同様に共産党の戦後三〇年をかけた水準を越す得票を獲得したのである。

茨城の選挙戦が「外見上」おおむね「普通」のまじめな(スマートな)運動としておこなわれ、内部的には地方政治の表層土をとりつけて未来のA地方党Vメンバーを発掘してゆくことに眼がむけられていた。それが、四万票という「有力候補」としても「ほりまつ候補」としても中途半端な票数は全体としてはスマートの結果だろうが、A地方党Vの観点から言えば(前記日共との比較という水準ではなく)予想以上の現認を得たと考えよう。

象徴的にいえば、「四万人は四万種類のA地方党Vイメージをそれぞれ抱いて石川候補に注目した」のである。

開かれた「バンドラの箱」

だから、このような意味でこそ茨城地方党がA地方党(準)である意味をはっきりと

わきまえておかなければならないのだと思うわけだ。

もう君もこのA地方党Vを「賭け」や「遊び」や「選挙」の一般水準と分けて見てくれていると思うが、仮にそのように見たとしても、このA地方党Vはそのものとして今や完全に後もどり不可能であり、別の意味でこれは我々にとっても同様のものだ。

このA選挙Vという実験を経て、A地方党Vは本来の下からの形成と具体的な敵の設定によるたまたかの緒についた。こうしたA地方Vの闘いが根づく過程で将来とりくまれるだろう「次の」選挙は、従って、今回のものとは意味も形も変わってくるはずだ。今回の選挙が我々にとってA実験Vだとしても、A地方V自身にとっては全く異なる意味をもつことはいうまでもない。

このA選挙Vで我々がA地方Vにたいして何かできると考える不遜は「地方の復権は地方自らの事業だ」という我々の原則からの逸脱であることについてもあらためて確認しておかなければならないと思う。

だから、僕は今回の選挙の結果についての本格的解析の仕事をするつもりはない、そしてA選挙Vの結果あらわれはじめた驚くほど

ようというまじめな話に花を咲かせたりもした。だが、これらの安全圏から革命を語るまじめな発想も、我々がこの数年解体し続けた古典的諸スターリニズムとともに「革命」「階級形成」「民衆の自立」「党」という様々な位相のちがうファクターをみそもくもいっしょくたにしたむじまきなあるいは度しがたい反(半)革命思想であることにはかわりがない。

我々は、前者(上からのスターリニズム)が大手を振っている以上、またその基本的解体戦が完了しない以上、後者(現場派)を批判しないことにしていた。当然のことながら民衆の一人としての個人が、まじめに現場の発想に立って自立し、日々の営為を闘うことはもっとも大切なことなのだから……。そしてこのような人々の努力によって、民衆の強固な原像が形成されるのだから……。

しかし、このような正しい立場にかくれながら、その立場をアプリアリに(個々の民衆の運動の利害をそのままA政治Vの指導理念などにすりかえて)A革命Vに反映させようとするマヤカシを主張する人々があらわれるに及んで、それを放置することは、これもま

の政治流動(A第三勢力Vが無数に名のりを上げはじめた)等)についてそらそらしく「位置づけ」などを君に話そうとも思わない。僕が、君に伝えたいのは「バンドラの箱はもう開かれてしまった」という実感だけだ。



《都市》と《地方》

J君

僕はこれまであらゆる意味で云われる「政治的プラグマティズム」を批判してきた。だから、逆に多くのごく普通の常識をもった人々から僕は「お前は何を思って急にピューリタンになったのか?」というまとはずれの疑問を投げかけられるしまつた。

たとえば、山口武秀氏のような、高等遊戯として、又は個人的「英雄主義」のために本来的に大衆行動がその属性として持っているダイナミズムを利用したとしても、それはその目的以上の意味を持つことはむずかしい。と。また、みずから生き残るという目的のために世界を倒立せしめ、そのような「立脚

た犯罪的であると考えるに至った。なぜならば、民衆が運動に決起すること自体と、A革命Vはそのこと自体として無関係なのであり、その様な発想は民衆の運動にさえ有害なことから。そして我々は「大衆の政治同盟」及び「党」の問題という例の立場を鮮明にさせはじめた。

ましてや、現在、どうもA現場Vに存在してさえいれば「清く、正しく、美しく」、また「いつか必ず目が出る」という神話自身崩壊しつつあり、だから逆に「目が出る」はずだったにもかかわらず、なかなか「目が出ない」現場の立場からのA政治的プラグマティズムVが発生しはじめている、と我々には思えてならない。

たとえば、それはA都市V住民の利益に立ったA開発VをA地方Vに押しつける先頭に住民運動が立ち、組織労働者の食いつけのじやまになるA弱者Vを労働運動がA福祉Vの対象にしてしまうという形であらわれ、それらの運動の主体が革命的に開きあるという構図の出現などである。

僕らにとって、何の立場に立つことがA革命的Vで、どのような現場にすることが意味

があるのか、ということ再度考えなおさなければならぬ時であり、マルクスが「プロレタリア革命（弱者革命）」と言ったことを、そしてその意味を再度革命しなければならぬ時期に来ているのではなからうか。

そしてさらに重要なのは、歴史上何故にA党Vが発生し、いかなるA党Vが歴史的役割をはたし得たかということ……。

M君のけなげな努力

僕はいままでA都市・地方Vを、A革命Vの与件として考える場合の位相のちがいを様々な面から述べてきた。それはたかだかA選挙Vという事件を通じてすら決定的なちがいとして僕らの前に対面せざるを得ない相を持っていると……。

言うまでもなく、それらをA革命Vの与件と考える者の運動にとっては、片方が解体されつつある民衆の協同性を「防衛」するという形を取るし、一方は必然的に解体されつつ、された民衆の共同性を何らかの契機又はA運動Vによって「新たに形成する」というパターンをとらざるを得ない。そのことを我々は「階級形成戦」と仮に呼んでいる。そして、

派の運動しかありやうがないのだから。

だから我々は、僕がかつてM君と共に苦勞しながらやった（そしてM君は今でも黙々とやっている）この運動を他の一切の政治的な「賭け」か「遊び」でしかないA運動Vにくらべ、はるかに現実的な「与件」たり得るものだと考えている。

最近僕はM君に会って久しぶりに話をした時、つくづくA都市Vの悲劇性を感じざるを得なかった。M君は「僕はA近方からV派ですよ」という象徴的なことを言った。

仮にそれが、我々を「走資派」と言ったマルクス・スターリニストとは別の立場であることのギリギリの意志表示であったとしてもそれらのやからとニアミスをおこなうA近方からV派という表現を、本来「政治家」であるM君をして取らざるを得ない（さもなければ沈黙のほかない）「都市運動」の置かれた悲しむべき位相を表わしている。

M君は、このままA政治（革命？）VとA日常（運動）Vのはざまを浮遊している以上おそらく、彼が優秀であるからこそ、一生このA都市Vのメビウスの輪をかけめぐらざるほかにあるまい。M君ばかりではなく、A都市Vは多くのまじめな無名のA戦士Vたちの生血と

今僕が「契機又はA運動V」と言ったのは経験的に云ってかなり重要なことなのだ。君もおそらく気がついておられると思うがA都市Vの様々な管為はこの「契機」かA運動Vかどちらかの側にかたよっていることが多い。たまたもしかしたらかたよらざるを得ないのだ。

J君

我々は、このA契機Vにかたよる側面については「遠方から」二号でくわしく、ファシズム（又は「天皇制」問題等）の発生過程を追う型で分析してきた。そして、今僕が述べたいのは後者のA運動Vにかたよる方だ。ことわっておくが運動にA Vをつけた理由はあえて云わないが、このことで我々が運動を否定しているなどという誤解だけはしないでくれ。このA運動Vという意味は、たとえばシンコ派というような言い方を想定してもらえば充分だ。

我々の「古い友人」にM君という人がいる。僕は、かつてかなり長いあいだM君とともにこのA都市Vにおける共同性を形成する運動という立場で「協同原則による住民運動」に参加した経験をもっている。今でも我々の仲間の多くの人は、この運動に、生協・共同購入運動・地域（住区）協同管理運動、地域協

生気を吸いつくしながら、この資本制のメトロポールとしての位置を保ちA地方Vを同化し続けているのである。だから、我々を「地方派」と誤解しているまじめな人々に対しては「やがてまみえる日までに、A都市Vの運動を背景に敵対せよ」と答えることにしている。まじめな「都市派」の諸君とこの春、

春闘問題で何回か話し合ったとき、我々がA弱者プロレタリア群Vと「弱小企業主」等々が連合して保革（労資エリート）エスタブリッシュメントに対決するという運動構造上の方法論を提起するに及び、その恐ろしさ（ファシストと同一位相の）に身ぶるいし、我々とつき合いを断つどころか、荷物をまとめて故郷に逃げてしまおうというA風景Vを度々見たときも、僕らが内なるA都市Vから脱出し、逆にA都市Vを解体し新しい共同性を形成する戦闘につくとういことのみずかしさをいやというほど味わったものだ。

たとえば、そのことは次のようなハブニングを生むこともあった。「遠方から」一・二号を通して度々ふれたように、我々は野坂昭如に代表される「ある種の政治性」に注目し続けてきた。しよせん彼の政治行動が「風俗」にならざるを得ないという宿命があったとし

同医療運動、……という様々な型で参加している。そして、これらの運動が、A都市Vにおける新しい共同性形成の重要な核になることもまぎれもない事実だと思ふ。しかし、これらの運動自体は、ちょうど労働運動自体がそうであると同様にA革命Vにとっては何も意味していないことは認めざるを得ない。俗な言い方をすれば、労働運動と全く同様に、それらの運動がA食い逃げ階級Vの戦闘的共同体という決定的な反動としての役割を荷なうこともあれば、社会主義革命における過渡的形態として階級形成の主体たることもあるのだから。

はじをさらすようだが、我々がこのように冷静に言えるようになったのもそう古いことではない。今から思えば、はずかしくなる位これらの運動についても「様々なこと」を言ってきた。そのことは（言いわけと取られても仕方がないが）A都市Vの運動——つまり革命派の与件としての都市——がこの手の運動に全てをかけねばならぬほど困難であることとの逆の証明でさえあるのだ。なぜならば他に何ががあるかと言えば、出物・はれ物的「公害運動」や「自分を高く売りつける化粧をするような」諸運動か、または一揆的なカゲキ

でも、なおかつその大衆動員構造を注目し続けてきたのである。だからこそ、野坂が今回の都知事選に立候補のかま、えをみせたとき、我々はそれを評価もしたし称賛さえしたのである。

ところが、我々が彼を評価し称賛すればするほど、彼はその「反動性」と「美濃部の敵に利すること」に目ざめ、ついに立候補を断念し、あまつさえ「美濃部突撃隊」を買ってでるといっておまけまでつけてしまった。彼の「無自覚（？）」のジョウダンもかなり念が入っていた。

話を元にもどそう。M君のことはA都市Vの悲劇性一般の中で見すごしてしまふにはあまりに生々しすぎる。なぜならば、それは様々な意味で我々の鏡なのだからだ。また、M君がA革命Vの与件としての、都市における新しい共同性の形成を「新しい共同性の形成運動」として今後も続けるとしたら、それは気のどくな言い方だが「革命をやりましょ」というA革命運動Vが意味がないのと同様の問題を生み出すにちがいない。これを笑話として無視する権利を持つのはA与件VとしてA都市Vを見ない、まぎれもない純粹の「運動家」だけのはずである。

M君はそのような立場としてのけなげな「政治ばなれ」の努力をするという。しかし彼のA政治Vへの変わらない異常な関心を見ているとある類型を想わざるを得ずちょっと信用できないが、まあこのけなげな門出は祝っておこう。しかし、我々はこのような考え方には立たない。今や非常に少数になった僕らの仲間はどうなってもこのような「まじめ」な変身によって自分自身が生きられる可能性のないことを「自覚」し、なまぐさい決意をこめた者達の集団であると考えてもらってけっこうだ。



《都市》の人J君へ

J君

君も僕も、この大都会で生まれ育ちA都市V以外の世界がこの地球上に存在することを、本質的には「知らない」人間だ。

その僕らは度しがたく「風俗」的に変身する術を生れながらに属性として持っていることもよく自覚している。しかしその僕らがか

るか昔ほんの一瞬この大都会の街から街を群れながら走りぬけた時のアイデンティティとは一体何だったのだろうか。あれはとも「風俗」としてなつかしむにはあまりにも生々しく、本源的なものに思えてしかたがないのだ。当時の僕らはあらかじめ目の出そうな場所を選んだ結果だなどとすましてそのことを「位置づけ」るほどの水準になかった。また、たまたま用意された政治の中に僕らが飛び込んだだけだという偶然性で説明できるほど「あのダイナミズム」は整合的なものではなかった。それは、あきらかにその後一五年のA都市Vの時代と関係のあることではないのだろうか。ことわっておくが、何もA六〇年VやAプリントVの総括の話をしていてはな

い。
急に变なことを言うようだが、マルクスが「ドイツ農民戦争」でそしてエンゲルスが「家族・私有財産及び国家の起源」で述べている「ドイツが歴史の変り目ごとに新しい息吹きをとりもどすのは、そのゲルマン的未開性（地方的共同体）に回帰することに根拠を求めうる」という意味のことを云い、文化人類学がいう「自由な中世」又は「ヨーロッパの歴史に新風を吹き込むのは、いつの場合も農

村だ」という思想に都市のインテリゲンチヤがひかれること（A都市Vの時代の終焉の反映として）の意味は僕にもわかる。そしてそのような傾向の一つがドラゴンバットの言う「辺境の最深部へ退却せよ」という話にもなるし、一方それが風俗化すれば様々な「ディスカバー・ジャパン一派」を生み出す原因ともなるだろう。

だが正直云って、僕らのような根、からの度しがたき都会人にとって、そして特に僕のようにもかなり永く「ドサマワリ」をやっている者にとっては、とくに「ディスカバー・ジャパン一派」が称賛するA地方Vの部分は、彼らの言うほど快適だとはかりは言えないし、彼らのA地方Vを風景にしてしまう傾向は何よりもA地方Vに対する攻撃だということが最近よくわかってきた。このような僕らのA地方Vに対する異和感——これはA地方Vの我々に対する異和感でもあるだろう——は、そうかんたんな問題ではないであろう。この異和感を消すのには永い時間がかかる。僕はますます考えるようになっていく。むしろ、異和感を前提に（つまり僕らがA地方Vを理解することは結局できないだろうという）事に当たったほうがはるかに生産的だと思ふ。

僕らがA内なる都市Vを解体するまでは……。

この僕らのA内なる都市Vを解体する作業は、何もA地方Vとつきあうための「作法」などでは全くないのだ。前にM君についてクドクドと言ってきた「都市の悲劇性」を主体的にとらえるための唯一の論理となるべきものだと考えてもらえばよいと思う。この内なるA都市Vの論理は、かの太田大先生の思想の中にもあるばかりではなく、M君が「僕はA近方からV派だ」と言うことの内にもある。

そういえば、我々とは全く別の方法でこの「内なる都市の論理」との孤独な闘いをしていく吉本隆明さんに対する、何回目かの十字砲火がまた最近あびせかけられている。気のどくなことに、その飛ばちちりを「叛旗」の諸君もこうむっている。僕らは「救援」を出そうにも別の世界の事件なので手を出せないし、また「十字砲火」が的はずれなものなので不沈戦艦・吉本には何の損害もないことははっきりしているのだ。また例によって高見の見物をしているが、今度の場合も逆に吉本さんに代表されるA都市Vに対する「個人」のまじめな解戦の性格と質と水準が浮き盛りにされたような結果になったようだ。

僕らのような、根っからのなまぐさ派には

とてもまねができないし、又よくもまあ、あのような砂をかむような営為にたえられるものだ、と失礼な感心をしているところだ（もともと僕らこそ「どうしようもないやつ」と思われているのだろうか）。

だが、我々は「遠方から」来た者だ。だからA都市VもA地方Vも我々の革命にとってのA与件Vとしての位置から一歩も逸脱させてはならないと考えている。ましてA地方Vについては多くの「地方派」のように、A地方Vを結果として対象化するという態度はとらない。我々にとってA地方Vは、はじめから革命にとってのA与件Vとして、はっきり考えておく。

だから我々と、A地方Vの多くの人々との関係は今後も「友好的緊張関係」というつかれる、関係以上のものを作ることにはできないだろうし、又作ってはならないのだ。なぜならば、我々の本来の闘である「内なる都市」との戦闘のためにこそそれが必要なのだ。

J君

僕らが、かつてはじめたA都市Vへの叛逆をさらに進め、最終的解体の日まで続けよう。これが僕ら根っからの都市人のつとめだ。

(完)

遠方からの手紙

■革命的人民の「アイドル」滝田某は、その思想の「革命性」と何のかわりもなく、桜田門のドブネズミ共のアイドルとしても充分その重責をはたしてきた。世のあらゆるジャーナリズムも、全く同水準の黒子として滝田神話を作ってきた。滝田との「かかわり」のある多くの文化人たちの「恐怖」はその神話をさらにきらびやかにしてきた。■そして時がたち、黒子たちの目的が達せられるや、滝田はあわれ忘れられる。その辺の茶番性をめざらしく「週刊ポスト」が昨年シリーズで取りあげた。そのことよって、黒子たちの最後の「野望」は打ちくだかれた。そして、滝田の利用価値は質的に低下した。黒子たちは新しい「アイドル」を物色しはじめた。ある党派の、ある人物が候補にされかかったが、悪漢たちによってやめさせられた。■やがて黒子たちは有力な「アイドル」を育成することに成功した。ナゾの新しいスターは、ここ当分まじめな兵士の生血を吸いながら声望を高め、再び文化人達の「恐怖」の的としての虚名をはせるだろう。

(火野)

「ポツダム労働組合」解体

——日本共産党の戦略転換——

編 集 部



少し古い世代の者にとっては日本共産党は革命派の「古巣」である。いまだに「日共」などという略称がこの世代にはしっくりしない。その後「日共」はあらゆる意味で「革命」を卒業したけれども、よくある話で、「世の中」が変わったのだから旧マルクス主義政党が社民化する一例にすぎない。つまりこの変化もまたありふれたことに思えたのである。

けれども、最近の日共の動向をみると、たんに類型的な歴史的知識では割り切れない「異様な」変化が新たに始まっているのではないかと考えたくなる。以下に、三月二二日の見

解（宮本談話）をてがかりにこの点を少しついでみよう。

（一）「春闘」を捨て「選挙」を選ぶ

日共見解は、直接には自治体人件費にたいする攻撃に反論する目的で出されたものだが、とくにそのうちで、自治体労働者にむけた部分が広く反響をよんでいる。自治体労働者は憲法の定めるところ「全体の奉仕者」なのだから、賃上げなど「労働者の権利」を理由に住民サービスを怠ってはならないというのである。この部分はその後自治労などとの間で

論争をひこおじているがこれ自体は目クソ鼻クソのたぐいでどうでもいいことだ。しかしこの論点の背後にある問題については十分に注目する必要がある。

日共見解はいうまでもなく春闘と統一地方選のさ中に出されたのであり、別のいい方をすれば自治体問題としては日共は春闘か選挙かの二者択一を迫られた時期にあたっている。すでにわれわれが「速方から」前号でくりかえし強調したように自治体財政の危機の大きな要因がその人件費比率の増大にあることは事実である。つまり自治体労使双方による自

治体の食い逃げである。日共は財政危機の要因を二つあげ、一つは「三割自治」つまり国と大資本の責任におしつけ、第二には「部落解放同盟朝田派による地方財政の食い逃げ」（「見解」）のせいになっているが、住民感情からすれば「自治労による賃上げ」に目をつぶってすませないことは明らかである。そしてこの「住民感情」にこそ日共はいま最も気をつかっているのである。とりわけ、「朝田派の食い逃げ」と自治労の食い逃げは地方財政全般のみならず特に「住民福祉」費への圧迫となってひびいているのであり、この福祉こそは「住民」に直結するものであることはいうまでもない。そして地方選挙である。「住民」の票をもっぱらあてにせねばならぬ日共にとっては、「自治体財政の危機」「国の責任」などよりこれは致命的だ。そこで、一部の地方では「朝田派の食い逃げ」にたいして異様なほどの反対キャンペーンにたこととは本誌前号が詳論するとうりだが、「自治労」についても黙っているわけにいかなくなってきたのである。日共見解は、地方財政危機の「第三の要因」を指摘しそれへの方針をだしたものに他ならない。「もし、自治体労働者の職務や財源の性質を無視し、住民の意見

になんらの考慮をほらわずに、自治体労働者の賃金は高ければ高いほどよいという単純な見地に立って、賃金闘争に対処するようなことがあれば、「低賃金労働者の解消のために地域住民と一緒にたかたか」などといっても、それは実際的には空文句にすぎず、かえって自民党政府の分断策動に乗せられるだけとなるろう。」（宮本談話への自治労見解にたいする反論）。

解説の要はあるまい。時節から選挙か春闘かの選択を迫られて、日共は自治体労働者に関し「春闘」を捨てたのである。だが、これはたんに選挙めあてに「住民」にコピを売ったにすぎないことだろうか。あるいは、自治体労働者にかぎっての政策であろうか。

（二）「労働組合」を捨て「住民」を選ぶ

日共見解にたいしては「労働者（階級）」に敵対するものという批判がだされている。だがこの水準での日共批判ははたしなみである。今日における「労働者階級」とはなにかという具体的な問題の検討ぬきに、これを「プロレタリアート」と二重うつしにして前提にすることは空論だからだ。日共もまたこの空論

からあとくされなく足を洗おうと努力している。だから、自治労が日共見解について次のようにつぶやく点こそが実は問題の核心をついている——日共見解は「自治体労働者の基本的権利については繰りかえしふれているものの、労働組合の基本的権利や賃金決定のありかたについてほとんどふれていないのが特徴的である」云々（「自治労見解」）。また、日共は「使用者としての自治体との間に純然たる労使関係のあることをアイマイにし」云々（自治労「再反論」）。

たしかに、日共は「労使関係」あるいは「労働組合」という観点で自治体労働者を見る立場を捨てたのである。この点は、革新自治体の場合をみればはっきりする。「住民奉仕」のための機構改革を「合理化」として機械的に否定するのは「原理的を誤り」であり、「とくに革新自治体のもとで自治体労働者がそういう態度をとることは、革新政治の発展に逆行するもの」だ（「自治労見解への反論」）。つまり、笑止にも「バリコンミュニの原則」をもちだしているように、革新自治体の労使関係はむしろ労使一体となった「住民奉仕」と位置づけるべきだという。裏を返せばまさに、住民の猜疑心のまえて危機にたつ自治体

労使が一体となって自らを防衛しようとするのである。これは保守系の自治体でも変らず、いかえれば文字通り保革体制による既得権の防衛策である。ここにも、われわれが本誌で強調してきた「地方」の危機、それにたいする保革一致した危機感がみごとにあらわれている。自治労はあてこすっているが、日共のこの政策を自民党が当然のこととほめるのはもっともなのだ。「地方」の危機は別に「東京都」だけのことではないのだから。

だが、以上の問題にはもっと深く考えてみるべきことがある。「労働組合」——「自治労」はそれではどうなるかという問題である。戦後の革新政党（政治）のことを思いだしてみよう。この政治は決して直接一般「住民」と関係していたのではない。戦後の労組や自治会つまりポツダム型の大衆組織が政党と大衆を媒介していた。選挙一つとってもこれら組織を通じておこなわれたことは今日社会党と大労組との関係に形骸をとどめている。この点は保守党と農村共同体との関係でも同じようなものだ。そして保革を問わず、このような戦後ポツダム型大衆組織が風化解体を深めた事実こそ、今回の地方選でもはっきりあらわれたことに他ならない。選挙一つをとっ

ても政党はわけのわからない「住民」を直接相手とせねばならないわけだ。

また今回の春闘をみるとよい。「低位平準化」型賃上げのなかで、民間大手では一斉に労使による個々の企業「運命共同体」の防衛だ。さる五月十四日の日経連総会が、賃上げは「今年から業種別、地域別に企業の経営状態次第で決まるようになり、賃上げ交渉が多様化している」と総括するようりである。この点は同じく日経連が「二十年間続いた春闘方式は変化し」たことの理由としてあげている。太田薫もまた「春闘の終えん」という題名の本を出版するそうだ。いうまでもなく「春闘方式」とは、政治過程への動員とともにポツダム労組のいわば華ともいえるべき行動様式であった。それがいまや大手各企業がなりふりかまわず「大巾賃上げ」（昨年）しまた「運命共同体の防衛」（今年）をするようになった。「春闘構造の止揚」どころのさわぎではない。選挙なども「企業選挙」となり、労組が革新政党の政治を媒介するなどというのは昔話となった。組合組織があるなしは別としてポツダム型の戦後労働組合の概念は事実上崩壊している。

こうしたなかで、日経連がその春闘総括で

とくに槍だまにあげたのは「公共企業体の労使」の親方日の丸的無責任であった。自治労も含め公企体労組こそは日共が有力な組合内反対派を形成してきた分野であり、またいまなおポツダム型労組の形骸をとどめているものであることはことわるまでもない。そしてこのポツダム公企体労組こそは、いま、保守派および「住民」の攻撃の矢面に立っているのである。

こうして、今回日共が選挙にさいして春闘を捨てたことは、実はポツダム労組としての自治労——公企体労組——を捨てたことを意味している。日共見解が「労働者」の基本的権利には触れても「労働組合」のそれには触れていないという自治労見解をここにもう一度思いだそう。もともと民間大手の労組で、日共の勢力がとるにたらないものであることを考えれば、これは一般に「労働組合」というものを捨てたことに等しいのだ。

戦後の革新政治はポツダム型大衆組織を媒介にした大衆との関係であったが、この構造がそもそも風化・解体した事実を、日共もまた戦略化しようとして努力していることをみのがしてはならない。日共の戦略とは、選挙を主要な武器として——いまのところ——直

接「住民」をつかむことであり、こうして得た革新自治体が「労使」一体となって今度は「住民福祉」政策の実施を媒介に「住民」をつかむのである。これは、住民ヘコピを売るなどといったものではないのであり、またこの新しい関係のうちにはそもそもポツダム労組の独自の位置などありえないことは明らかだ。日共見解が「労働組合」や「労使関係」に触れないのは、それこそ「深いワケ」があるのである。

もとより、「労働組合を捨てた」といってもこの組織を無用のものとして捨てるといふことではない。意味づけを変えるのであり、この転換は公企体労組では事実上「ポツダム労働組合」の解体を進行させるものとなっている。この点は重要なので次にやや具体的にみることにしよう。

(三) 内部から「ポツダム労組」を解体する

今度は日教組の例である。それもなるべく現場に近いところにいる日教組メンバーのおかれている状況をちょっとでもみてみよう。昨秋闘のスト批准は全国で十八、今春闘でも十九都道府県にとどまったが、この結果は事

実上県レベル以下の日共系支部が一斉に「画一スト反対」で動いたためであることは明らかである。日教組のストライキは通常日教組大会で決定された戦術を末端支部で批准投票にかけこれを県レベルで集約するという手続をふむ。批准の内容は大会決定された全国一律のものであり、この批准の手続・決定をまもることが日教組大会を頂点とするこの組合の「組織原則」の軸である。日共系であろうとまた反戦系であろうと、大会決定の戦術に反対の場合はまず反対の支部決定をとりこの決定を上へあげて中央に戦術変更を迫ることになる。もちろん反対派支部によるこの制度的フィードバックは通常無視される。しかし、無視しえない勢力をつくるために、反対派はあらゆる手段で多数派を切り崩し自らが「責任ある多数派」になっていくことに努力するのがルールである。実際このようにして、日共系は下から有力な反対派を日教組内につくりえたのだしいくつかの県レベルではその主導権をにぎるにいたっている。けれども、こうした反対派の努力が大会決定をくつがえすに至らぬ場合は、大会決定に従って支部はストの批准投票を最終的にはおこなうのであり、反対だからといって支部単独で別の行動をと

ることは「統制処分」の対象となる。おまかについて以上はストをめぐるこの労組の組織運営方式であり、「組織原則」ののっつた多数派工作というポツダム労組内の基本的活動パターンもここにある。だが昨秋来の日共系支部のやり方はストに反対した（だから反労働者の？）という点に特徴があるのではなく、これが以上のポツダム労組の組織ルールを破る決意のもとになされているという点に注目すべき問題がある。だから四・一七のスト反対とは基本的にはちがうのだ。たとえば、ある県の末端支部の例をみよう。ここではすでに「画一スト戦術」反対が決定されておりこれが日教組臨時大会（第四六回、三月）決定と異なることが確認される。そこでこうした事態について「組合員に正しく伝え討論を深める」ことが決定されるが、スト批准については統制処分を考慮して中央から下りてきた投票用紙をドブに捨てることはせず機械的に下に流す。通常は大会決定を支部機関で確認してこのもとに投票をおこなうのだがそれはしない。その代りさきの「討論を深める」ことがおこなわれ、批准投票については「組合員一人一人の基本的権利であり、戦術を最終的に決めるもの」——つまり、大会

決定の「承認」ではなく——という「定義」が強調される。やや話は微妙だが、ストつぶしのやり方であることに変わりはなく、そのへんの機微については組合活動を経験した者にはよくわかることだろう。しかも、組合内部のこうした「画一スト反対」活動に加えて、「父母・国民と教職員の分断」を阻止するという名目で組合員が一斉に父母オルグのりだす。つまり組合運動の枠をはみだした「住民との連帯」である！ある県の支部では——「昨年十一月よりこの四ヶ月「地殻変動」ともいえる大きな変化が生れている。それは「網の目行動」によるもので、ひかえ目にみても七、八千人の父母との語り合いが深夜まで続けられた。××村では十二名の組合員が九つの部落に入り、学力・生活など村の現状等について話し合い、その中で「スト中軸」(注。日教組中央派のこと)の立場に立つ人々も感動したといっている。また保守的といわれる人々からもこういう集りならもっとやっけてほしいという意見もでた。こうした取り組みが県下二百以上で行われ、多くの組合員の確信となりつつある」云々(日教組第四六臨時大会での発言より)。

典型的な現場共産党員スタイルの発言だが、とつてもそのはずだ。今度もこのような「激変」に耐えうるものだけが共産党員として残っていくことになるのであろう。

ところで、日共見解の当面の焦点自治労だが、ここでも結果は目に見えている。今春闘にしても、「地域住民の所得水準、生活水準を考慮にいれないで、「大幅賃上げ」に最大の焦点をあてた組合活動を展開するならば、そういう活動はあまりうまくいかないだろうし、住民の側から根拠のある批判をうけることになってくるだろう」(「前衛」四月号)という日共の攻撃に事実上屈服してしまった。加えるに、自治省・自民党の攻撃ばかりでなく、「地方」の第三勢力の攻撃にも直面しているのである(「東風」五月号の咲谷論文「統一地方選挙と八第三勢力Vの形成」を参照されたい)。実際、今春闘で、とりわけ「地方」の自治労は、「本来もらえるものすら要求しない」ような状況に追い込まれたのであった。地域住民をまえた自治労のこの萎縮が、日共の批判で倍加したことはいうまでもない。ここでも組合内の努力をとりこぼして日共は直接「住民」に訴える。これは文字通り「悪宣伝」といふべきものだ。ちょうど「解同朝田派の食いつぶし」にたいして住民

「父母」と深夜までどんな「語り合い」がおこなわれ「保守的といわれる人々」までが何に「感激」したかは、まさに推して知るべしである。

以上のような現場の状況からみれば、昨秋闘、今春闘のスト批准の結果などは目に見えている。「聖職」である先生のストは反対という「保守的といわれる人々」「父母」の劣情まで刺激することをやったのだからだ。われわれが以上に細い話をしたのも、労働組合についての日共の転換とはまさにこうしたミクロなところにその意味があらわれているからだ。日共見解の字面にあげ足をとって思ひまらぬ問題である。そしてわれわれは思うのだが、日共の年期の入った現場活動家のうちには、さきに述べたような労働組合の「組織原則」で育った者もいるはずだ。彼はそれこそポツダム労働組の多数派工作で生きてきた者のはずだ。日本共産党を革命派の「古巣」といまでも感じる古い世代にとっては、ついでこのような活動家の身になって考えてしまふと、とりわけついでの間までは、「画一スト反対・山猫スト」をとらえた反戦派を彼はまさに労働組の「組織原則」で切ってきたはずだ。「画一スト」でないストライキなどはポツダム

に訴えたのと同様である。そしてこの悪宣伝が不況とインフレをかぶっている「住民」に大きな効果をあげていることもまた両者に共通だ。日共自らが「護民官」を気どりまた地方の住民のなかで一種「正義の味方黄金バット」のごとくみなされていることは理由のないことではない。われわれは「住民」の劣情を刺激することのやり口にファシズムの臭いをかぐ——「社会ファシズム」である。もとより「民主主義の護民官」としてファシズムの歴史的類型にはいまのところあてはまらないが。

(四) 「革新統一」から「民主的 反ファシズム革命」へ

日共見解の背後で進行する以上のような事実をみるならば、「裏切り史観」の延長上にある新左翼の日共批判はひどく的をはずしているといわざるをえない。日共の労働組合にたいする路線転換は八回大会以降のたんなる延長でもなければ、また四・一七スト反対のくりかえしでもない。むしろ極端にいて、全共闘運動がポツダム自治会の観念を掃した後をうけて、日共自らがポツダム労働組合の考え方とスタイルを解体するという事実、

組合ではストライキの定義には属さない。それなのにいまは、活動スタイルのうえで反戦派と全く同じことを日共党員の彼がせねばならぬ。とりわけ、「父母」のオルグなどにより、既成の組合組織よりも「住民との連帯」をとらねばならぬが、これも形は反戦派の主張と変わらない。組合内では、次のような非難の矢面に立たされるのは今度日共党員の彼である——「共産党の主張を是認する人達は、批准投票は組合員の自由だといっているが、それは誤りだ。大会決定は最高決議機関による組織決定だ。批准は闘う体制づくりであり、大会決定が批准によってくつがえされるようでは、労働組としての意味がない。」(日教組大会での発言)。このような組織原則無視という非難に抗して日共系党員が「画一スト」に反対するとしたら、これはもう事実上「ポツダム労働組」の路線というほかない。全共闘の「ポツダム自治会解体」のあとを受けて今度は日共の「ポツダム労働組合解体」である(?!)。このようにみれば、これは八回大会についで日本共産党の大転換でありこれに比べれば「プロレタリアート(革命)」を捨てたことなど昔話にすぎない。これまで、ポツダム労働組で生きてきた現場日共活動家に

真剣に注目すべきだ。ここに、日共による戦後体制の総括点もあり、戦後政治史の与野党体制とは違った意味でわれわれが「保革体制」「二大階級の食い逃げ体制」をいう真意もあるのである。

「私は、日共の一連の動きをみると、従来の社共などを中心とする民主的政府構想より、自民党などすべての政党が参加した選挙管理内閣を主として考えているのではないかと、思うようになった。民主的政府より、資本の一部も参加した大連合。その道を一歩は通らないと、多数国民の安定的な支持を獲得できないのではないか。こう日共委員長が考えたとき、これは間違いだろうか」(岩井章、月刊「まなぶ」。朝日新聞五月五日号参照)。これは地方選での「社共中軸」路線の後退を心配する趣旨の論文の一節だが、重要な指摘である。社会党が自治労はじめ主にポツダム労働組の形骸に乗った党であったら、日共のポツダム労働組離れが「社共中軸」を根もとから動揺させるのは当然である。さきに指摘したが、日共戦略はもはや戦後政治過程のようにポツダム型大衆組織を媒介した革新政党と大衆の関係を軸にはしていない。革新自治体の場合に典型的にみられるように「労

使「一体となった「住民」との関係が主軸なのであり、ここにはわけのわからぬ「住民」、不気味な「地方」にたいする保革に共通の防衛策という色あいが強くでていたのである。

本誌前号までにわれわれの展開した「保革体制」問題を再度みていたきたい。また、宮本は「革新統一戦線の問題と同時に、最近イタリヤで共産党は、民主的、反ファシズム革命ということを出しているのに注目して「います」と述べている（「日本記者クラブでの講演」）。この「革命」が「保守」を含むことはいまでもなく、実際、今年三月イタリヤ共産党大会の決定となったカトリック保守派との「歴史的和解」のことを指している。岩井の心配は多分当たっているだろう。これはまた、われわれがいま社会党——とりわけ「地方」の——の動揺・解体状況に最も注目している理由ともなっている（本誌別号をみよ）。さて日本共産党の路線転換について暫定的なまとめをしよう。日共は「選挙党」として直接「住民」をつかまねばならない。ここには戦後過程の特色となっていた大衆組織や階級組織の媒介はないし、住民と直結しようとする日共路線がこれらポツダム型組織の風化解体を促進する働きをするようにすらなっ

ている。もちろん「住民（運動）組織」は存在するがこれは資格の決ったメンバーの多数決で運営されるポツダム組織とはちがうし、また活動家も戦後過程で育ったものとは異質のものだ。こうして今後日共は、住民を直接つかむための戦術を次々にあみだしこれをただちに一致団結して実行に移すことを、その仕事の中軸にすえていくだろう。それが日共をどこへつれていくのか？

われわれは本誌前号までの現状認識のなかで、戦後体制と戦後の「階級組織」が解体・風化するとともに、それぞれ「保革体制」「二大食い逃げ階級」として膨大な「弱者」プロレタリア群に直面していることを確認した。そしてわれわれは、これらプロレタリア群が——とりわけ地方で——どのように新たな政治をつくりだすのか、どのような政治的共同性をつくりだすのか——つまりこれら新しい「国民運動」の形成に注目し、これを与件としてわれわれの階級形成戦を位置づけたのである。日共の「住民」に関する現状認識が、われわれとは反対の方向からわれわれの確認に重なってくることはこうして明白である。「プロレタリア革命」の昔話にふけることをやめ、新たな階級形成・大衆権力の形成を助

けおしすめようとするすべての諸君は、われわれと同様、あらゆる活動の分野でまさに日本共産党の部隊と出くわしこれと衝突することになるのは必至だ。われわれがわれわれの戦略を「右翼ナショナリスト」や「ファシスト」を反面教師として展開したのと全く同様に、日共の今後のあり方に最大限の注意を怠ってはならないだろう。

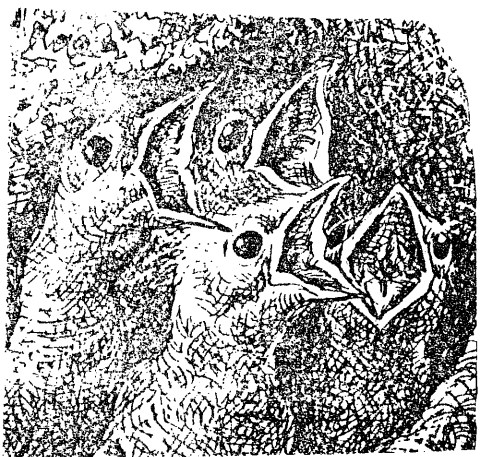
遠方からの手紙

日本共産党が宮本談話で「ポツダム型組織論」を捨てたとき、この組織論で育ちこれの最初の解体を経験した政治世代にとっては、戦後左翼の伝統がこれで最終的に絶えるのだと思われた。戦後ポツダム型組織論では「大衆」とは大衆の集団（意志）のことであり、いわばこれが政治のハードな骨組となっていた。だから「政治家」もこの骨組の加工技術にたとえられたし彼の技術は広く継承可能のものであった。だが、いまや残るのはただソフトな「大衆」「住民」の群である。おそらくこの間狭い「党」の間に追いつかれた政治の技術は、一転してこれら大衆の直接操作へとふりむけられるにちがいない。（咲谷）

ブレントのついでに

共産主義者同盟の〈青年期〉へ

正木真一



「遠方から」創刊号の「ブレントについて」において咲谷は、「以下に私たちが触れていることとする事柄は、だから、共産主義者同盟の歴史ではない」との前提の上で、第一次ブレント解体期の分派闘争について論じた。われわれがブレントの過去を今ほりかえそうとするのは、現存するさまざまなブレント理解が、「新左翼」の現況に対する保守主義として、働

らいている状況への闘いとしてである。しかし、過去の事柄を直接にとりあつかうかぎり、現在われわれが直面する課題を論ずる中に、過去が登場するのは異なり、いくつかの前提が読者との間で一致しない限り懐

古趣味と受けとられる危険がある。しかもいくつかの前提そのものが、そもそも問題だとするならば、われわれの作業が読者諸君とすれちがうのは、ある程度止むをえないのかもしれない。願わくば、他の論文との対比の中で、われわれの意図を読みとられんことを。

「ブレントについて・二」もまた「ブレントと日本階級闘争」「ブレントと学生運動」という題の下に書かれたい、または「私小説」風に「ブレントについて」のみ書くつもりである。現実の階級闘争と無関係なスコラの懐古とまともや読まれることもありうるであろう。しかし同窓会的想い出話に属する、ブレントのお

家の事情にすぎないブレントの党建設問題を、その客観的背景をなす、政治・社会状況との関係の中で論じないと言いのには、それなりの理由がある。

創刊号で咲谷が述べたように、ブレントの「理論」は他党派からみれば過度に「実践の理論」であって、革共同流に「理論の実践」を行おうとして大衆に足をすくわれるようなことはなかった。だからブレントを評価しようとするものは全て、その時の大衆闘争に照らして、ブレントの理論（方針）を語ろうとしてきた。代々木派を離れてさえも、ついに代々木内反対派から一歩も踏みでることができない

ている津田道夫が、かつて「タテマエ」としての第一次ブント理論を批判しつつ「ホンネ」としての「学生運動を代々木派の誤りから防衛する意図」を評価したのも、われわれからみれば、ひいきのひき倒しでありがた迷惑ではあったが、成立しうるブント理解の典型ではある。

「理論と実践とを独得に関連させるブント主義を、日共のみならず新左翼内の他党派に対する優位として護持する時代が終りを告げている」（咲谷）ことを前提とするかぎりブントの理論と実践との関わり方から、ブントの軌跡を合理化するという叙述の方法をとるわけにはゆかない。可能なかぎりブントの主観的意図・党派の意図（党派の利害）の側からみるという立場を採ることとする。これだけが、これまで「ブントと大衆闘争」の枠で論ずることにより、「党」そのものの「立脚点」については、代々木派から革マル派にいたるハマルクス・スターリン主義Vに足をすくわれ、無自覚にスターリン主義へ転向したり、大衆主義者に後退したり、「歴史家」に止まったりした人々における「党概念」とわれわれの言う「党」の違いを明らかにする方法であろうと考えるからである。

つの組織たらしめなかったのかは明らかであるとは言えない。「理論上の相違を組織上の相違として表現すること」が組織において原則であるという「日本新左翼のぬきがたい倒錯」を前提してしか、この新左翼もまた理解不可能なのである。もしそうであるならば、完全に日本共産党が「構造改革戦略」に転換したことを、これらの人々は説明しようとするのであろうか。いうまでもなく「党」にとって政治戦略の転換は常に可能なのだ。「党」にとって転換不可能なもの、今、われわれが問題にしようとするのはこれをめぐってである。

○〇闘争とX派と問題を設定するかぎり、相対的にこの時はX派が正しいといった総括のみが可能であり、ある「党」の正しさ、あるいは一貫性といったものによって何の意味を持ちえない。だからわれわれが「内面告白的」「私小説風」に「ブントについて」語ったとしても、それは「党史観」を主張しているのではない。

第一次ブントは「同盟内の革マル主義をとことんえぐりだし」たことによって、「党中

革共同全国委はかつて（おそらくは現在でも）「ブントは党建設の課題をおろそかにした」と主張したし、第二次ブントの分派闘争の際も戦旗派諸派は第一次ブントの戦旗派と同様に革共同の主張の二番せんじをしてみせてくれた。これで見ると、「安保闘争で解体した同盟の分派闘争の唯一の積極的意義は実のところ戦旗派を通じて同盟内の革マル主義をとことんえぐりだし、その後あともどり不可能なまでにハブントのスタイルVを純化した点にある」という咲谷の評価は一見ゆきすぎであるかに思われる。しかし、ここで言われているのはあくまでハブントのスタイルVまでであって、それは理論として自覚されているわけではなかったのである。その後あらわれる革マル主義の同盟内への再登場とそれをめぐる分派闘争は、「理論と実践」の問題として論争されるかぎり、いくどでもくりかえす問題なのである。

この革共同的批判に対し「いやブントは党建設を行おうとした」とブントの諸文書を取り出してみせたところで、これは主観的領域のことであって反論としては無力であろう。「党建設」という言葉で語られる意味に違いがある以上これは、そもそも意味をなさない

「党」が再建不能にまで解体され、学生運動に基盤を持つ一般同盟員がとり残された。革共同に転向しなかった部分が、東京・関西という学生運動の二大拠点であったのは偶然ではない。ブントの本拠地においては、ブントはブントであって、革共同ではなかったのだ。

そして中央を失ったブントは、大衆運動への指導性においてでなく、大衆運動のこの沈滞期における大衆運動の質、スタイルにおいて、革共同を反面教師として、あるべき「党」の倒立像として、自らの「党性」を自覚していかざるをえなかったのである。ブントが真に依拠していたものを自覚する過程として、「党」としてのブントは「党組織」の実体を持たなかったこの時期に躍動せる「ブントの青春」を開花させてゆくのである。

残された者の苦闘は、党と大衆のはざまにある工作者が常に直面する矛盾という域を超えて、党の大衆の關係の矛盾を党の実体のないときに、自己の中でつきつめざるをえなかったのである。党建設の問題は党中央がないだけに純化して立ち現われた。第一次ブント期||党の誕生期にあっては、ブント一般同盟員にとって「党」は戦略・戦術を充足させさえすればよかった。大衆にとっては「党」は

批判であったのであり、ハマルクス・スターリン主義V諸派の「党」という意味でブントを考えようとするかぎり、ブントは決して「党」を建設しえないのが実は当然なのである。

そして、革共同に転向せず、この新左翼十余年を懐古しようとする者は、その歴史を、代々木派や、革共同のように党史としては叙述できないのである。第一次ブントの同志であった蔵田計成君が「革命的左翼」の歴史を書こうとした時、「安保全学連」という表題の本を書かざるを得なかった（実際に題をつけたのは、著者であるか、出版社であるかは別にして）のは以上述べたことと無関係ではない。ここで述べられているブント諸理論・諸論争は、闘争との関わりで相対的にどれが正しかったかという視点が無意識のうちに貫かれていた。六〇年から七〇年にいたる新左翼史としては、おそらく唯一のこの本は、かつての斎藤一郎氏の労働運動史と同一の手法によって書かれているといつてよい。ここに書かれた諸事実が正確であるかどうかは別として、文書として世にあらわれているかぎりでのブントの主張を正しく伝えようとしていながらも、なにがブントをして代々木派から分離せしめたか、なにが革共同とブントを一

戦略・戦術でしかないのは当然なのであるから、この時期にあっては、同盟下部は、大衆の視点で「党中央」を視ていたことになる。

ブントが大衆にとって「前衛党」でありつづけることに、大衆に対して「党」である根拠を持つこととした第一次ブントの組織論は、形式的にみるかぎり堂々めぐりをするだけで、「党」の組織論としての体系性を持ちえないことは明白である。大衆にとっては「党」であったブントの幹部が大衆に対して「党」である根拠を見失ったとき、政治から身を引く、あるいはその根拠を求めて革共同に移った事実が、「ブントの無思想ゆえである」などと革共同があざけり笑うようなものではない。この事実こそブントの栄光であり革共同などの思想を高く超えるブント思想のカオスとしての表現であったことはやがて明らかにされるであろう。

大衆にとって「党」であることを、大衆に対して「党」であることの根拠にする（混同したのでないことに注意）という循環論法はいわゆる組織論の問題としてみるかぎりには、無内容であるが、ブントの持った革命像・革命思想としてみる時、コミンテルン左翼の一翼であるトロツキズムのさらに一亜種にしか

すぎない革マル主義をはるかに超える内容をはらんでいたのである。いわゆる組織論の問題はこの革命思想に基づきその後提出されるものであって、この後のブントの軌跡はこれを自覚する過程としてあったのだ。

その後のブント及びブント系運動にくりかえして現われる、党中央が消えると、ブント下部あるいはブントシンパがそれまでのノンセクト性をかなぐりすて、こつぜんとして「ブント」として立ち現れるという現象の第一回目がこの第一次ブントの解体後のいわゆる再建社学同（独立社学同の連合）期にあった。中央のないままに、社学同〇〇支部を名乗り、あるいは〇〇大社学同を勝手に名乗るといふのは、革共同型の組織にとっては全く異質である。これを表現する時にブント残党は、ブントの同盟者であった吉本隆明氏の「自立」概念を借用したし、この借用は、吉本亜流の自立主義よりは吉本氏に迷惑をかけていないと現在でもわれわれは考えるものであるが、吉本氏の「自立」概念からいっても当然のことながら、「吉本主義」の実践として独立社学同が成立したわけではない。このことだけは、吉本氏の名誉のためにも、ブントの名誉のためにも、第一次ブント残党の一員として

独立し、自らの官僚王国を階級の犠牲の下に構築するスターリニストの存在の仕方と完全に一致する。その結党以来、コミンテルンの正統派意識の固持の上に、自己以外の総ての思想と運動を異端として断罪し、もって、日本革命思想史に固有の観念的定型を形成してきたスターリニスト党の官僚的前衛性と一体どこが違うのか。

（都学連第十四回大会議案61年10月）

第一次ブント同盟員の大部分にとっては、黒田寛一及びその一派は、単に二流の政治家及びその集団にすぎなかった。かつて革共同党内闘争において、日本を従属国と規定する革命戦略を提出し、「現代における平和と革命」において平和闘争を持ち上げる、一步遅れた政治家として黒寛はみられており、大衆運動の指導においても、単にブントの同伴党派としてなんの創造性も、ダイナミズムも持っていないのであったから、このような認識はしごく当然であつたろう。だからこそ、ブントを大衆にとって「党」であるものとして見ていた、すなわち政治指導の実体化せるものとして「党」を視ていた同盟員にとって、ブント幹部の革共同への転向は全く不可解のものとしてあつたのである。両者の問題意識

証言しておく必要がある。

われわれはブントの思想を表現する言葉を独自の言葉で持たなかつただけのことであり、このこと自体は恥だとも思っていない。第一次ブントにおける「他党派から自己を区別する理論だつた同盟の組織論」にくらべればこの「自立主義」は、スターリニズム・トロツキズムに対して、積極的な自己定立の第一歩であつた。

再建社学同はさまざまな色合いの思想をばらみながらも、革共同全国委||黒寛主義批判の一点では完全に一致していた。その視点は反スターリン主義を唱えている黒寛主義をもスターリン主義と同質のものとして、同一に断罪しようとするものであつた。これは、党派の対立という政治的状況から直接には生まれたものには相違ないが、代々木派からのブントの分離、コミンテルン系の共産主義者（スターリニスト、構改革派、毛主義者、トロツキスト）との後もどりでできない分離を行ったことを意味する。いいかえれば、それまでのスターリン主義批判の枠では、しよせん、同一党派内の分派闘争にしかすぎないのであつて、第一次ブント期の革共同との間で論争された「別党コース」をめぐる論争が論争とし

は「党」を視る二つの視点として交差することなく対立したのである。都自代等で元ブント幹部とブント残党が出会う時、そこが大衆団体の場である場合は、残党たちは意気軒昂であり、革共同移行組幹部は眼を合せられないうという状況が常に起つたのも、「党」を視る物の差異が原因であつた。反面この都学連文書が、体系性を持った思想に対して、敗者の悲憤のトーンを持たざるを得なかつた限界もまた明らかであらう。

この時期の社学同は、六〇年代後半を色どるさまざまな問題をつき出した。だがこの章では、まず諸独自社学同に共通する革共同との対立をさらに深く追うことにする。その後「セクトNo.6派」対「東大派」の対立は以上の革共同という共通認識の深化の過程として成立してゆくのである。

この都学連議案が示すように、大衆にとつての「党」の位置がはつきりと煮つめられていったのである。「党」は「マルクス主義」の名においても「階級」の名においても、大衆に「強制」すべき、なんらの「権利」を有しないことが宣言された。これがノンセクト大衆によってでなく、ブント残党によってであるところに意味がある。かつてブントは自

ては、レーニン文献の解釈学としてなんらの生産性も持たなかつたのも、ここに理由があつたのである。すなわちブントにとって、別党でなければならぬ理由を十分に説明できず、実践上の直観という次元に実際は止まっていたのである。

革共同全国委との対立感情を「非前衛主義」というようにイデオロギー化されない生の形にみるために、「セクトNo.6」等の政治結社の文書でなく、まず社学同系大衆組織の文書でみてみよう。

恐るべき思想頹廢が進行している。自己の絶対無謬性と日本に於る革命的共産主義運動の正統性の謳歌と合唱の下に自己以外の、過渡期に固有の個人とグループによる自生的、自律的な思想的実験を政治的に圧殺し、絶滅しようとする頹廢がそれである。

かれらは「マル学同」に加盟し、革共同政治局の官僚支配に帰依するか、運動一般から逃亡するか二者択一を内外のアクティヴに強制する。何の権利によつてか、曰く「革命的マルクス主義」の創設者、及びその正統な継承者を自認することによつてである。それのみによつてである。

それは、階級の名を僭称しつつ階級から

己を、コミンテルン正統派（初期コミンテルン派）に位置づけ、初期コミンテルン文献の発掘に熱心であつた。だが「コミンテルン正統意識」はここでは断罪の対象として登場する。

アナーキストでなく、他ならぬ共産主義者が超えたこの地点は、ブントが論理として転換したのではなく、戦後世界が生んだ大衆運動と共産主義の緊張の中から踏み切りがなされたのである。このように「黨員」が大衆の中から、「党」の自己規定を迫る時「党」の側からする「立脚点」は一層あやういものとなる。すなわち「戦略・戦術の正しさ」はすでに「党」を大衆にとつて「前衛」たらしめめることを保証しないことは論理の必然として導びかれるからである。

3.

「前衛諸組織から訣べつし、意識的大衆の自立組織、社学同を建設せよ!」という「セクトNo.6」61.12.5紙上の社学同全国大会への結集アピールは、「疑似前衛への怒り」「前衛主義」への批判から始まり、「前衛を粉砕すること。二度と『前衛』などと主張する部分のあらわれて来ることを拒否すること」

という結論にいたっている。これは注目し値
することである。このアビールが「自立せる
大衆の組織、社学同」のものとしてみる時に
は、この問題は軽く見すぎられるかもしれ
ない。なぜならば、この「前衛主義」批判か
ら「前衛」批判への飛躍が次の文脈において
は消えているからである。

「労働者階級が、その不断の政治的闘争に
おける政治的経験の蓄積の度合に応じて、
それを通じて、政治権力を奪取するための
政治的武器・政治政党に自己を組織しなが
ら階級への形成を実現するのだとするなら
ば、我々は、我々自らが労働者階級の政治
的経験を豊かにする闘争を意識的に、不断
に組織しなければならぬ。……」

その為にも我々は、ブントにおける無意
識的定在としての非前衛主義の立場を、た
てまえにおいても、本音においても、自覚
的に貫徹しなければならぬ。……

その無意識的定在において示した「闘争
組織」即ち、その政治的機能性において大
衆の政治的エネルギーの解放の契機たるこ
とを追求した、非前衛的政治組織を自覚的
に貫徹する。」

これで見ると「階級への形成」の問

政治性格を持たざるをえなかったのである。
だから、大衆の「階級への形成」について述
べるのであれば「前衛主義」批判まででよい
ものを、論理としては飛躍して「非前衛主義」
「前衛」否定にまで及ばざるをえなかったの
である。

「党」派としてのブントにとって、問題は
一段高いところで出発の点に立ち戻った。

「セクトN.O.6」派と「蜂起」派の分派闘
争もここに始った。

4.

以上の再建社学同の共通基盤は後に「大衆
動主義」という風に、いとも簡単に要約され
て理解されているし、革共同の「大衆運動で
党を創る路線」などという誤った批判の延長
上でこの過程が理解されてきている。これは
第二次ブントの分派闘争の中でも、ブントの
誤ち、あるいは良さとして理解され論争され
ている。現在の遊撃派諸君の主張、われわれ
への批判なども、この手の水準である。

再建社学同のどのグループにおいてさえ、
大衆の闘いの中から党をつくることは主張さ
れていない。さきのアビールは端的に「階級
形成」を主張しているのであって「党形成」

題が語られているわけで、階級形成を抜きに
した「前衛が大衆の前を走り続けることによ
る支配構造へのくみこまれ」の批判として、
社学同の組織化が提起されているのであって、
「前衛」批判は、未だ「前衛主義」批判から
の飛躍として意識されていないかのごとくで
ある。しかしタイトル、結語は単に「前衛主
義」批判に止まらず「前衛」批判「前衛」克
服の問題として端的に提起されているのであ
る。この微妙なズレに問題の核心は潜んでい
る。

この文書の画期的な点は、先の都学連議案
において「官僚的前衛性」と表現された革マ
ル主義を含むスターリン主義を「前衛主義」
という形容詞抜きで直截に規定の下に切って
捨て、「階級形成」を対置したところにある。
スターリン主義を道徳的批判からするので
はなく、対置する組織論として行った。

そしてこのかぎり、どこまで意識化され
ていたかは別として、再建社学同の共通の問
題意識として存在したのである。

このことは、後に「セクトN.O.6」派によ
って批判されることになる東大派の「蜂起」
創刊号も「インテリゲンチヤの独自運動を」
と言い「我々は学生運動をその独自性におい

を主張していない。それどころか同じ号の上
玲子論文は「前衛だとか党だとか、そのよう
な特殊意識構造をとにかく破壊することなの
だ」とさえ書いている。そして、やがてこれ
と対立する「蜂起」渚雪彦論文は、黒寛批判
として「それは（黒寛理論のこと）労働者階
級の、階級としての形成（労働者の前衛＝共
同体）と前衛党の組織（前衛の政治的結合体
としての前衛党）の関係が全く不明だからだ」
といったように、問題は全く別のものとして
意識されており、共にさまざまな「労働者と
共に」派の代行主義とはっきりと訣別してい
る点こそが注目されなければならないのであ
る。この点からみるとここで言われ、後に対
立となる「組織論」をめぐる論争は当人が考
えているほど距離はないのであって、現在の
安易な大衆運動主義派との距離の方がはるか
に遠いのである。

当人たちが「自立せる大衆組織」と自己を
規定しても、党中央なき「活動家組織」は自
らを大衆に対して「党」として形成せざるを
えない。「党」の存在を前提として「自立せ
る大衆組織」はそれとの緊張の中で自らを階
級として形成しうるのである。この社学同の
かかえた矛盾は、その初期には、革共同を「

て捉え学生のすべてのエネルギーを汲みあげ
対決する。我々は急進主義者と呼ばれること
を恐れない。ブランキストと呼ばれることを
恐れない」と言うように、大衆の運動過程を
通じた組織化こそが革命の基軸であるとする
点で革共同と対決するという一致点を有して
いた。

「自立せる大衆組織、社学同」にとっては
前衛主義者たちは目ざわりであって、「前
衛」はそもそも問題になりえない。

だから逆に、論理がブントから革共同に行
った諸君の「党」の「立脚点」という問題意
識には、全くすれちがいであったのも当然で
あった。

だが整合的論理としては「階級形成」の問
題を大衆に即して述べているにすぎないこの
アビールが「非前衛主義」「前衛の克服」を
提起したため問題はさらに進んだのである。

「階級形成」の問題をブントなき社学同が
こう述べたとき、それは大衆の側からする「
階級形成」の論理が述べられたということに
止まりえないことである。党中央なきブント
残党が革共同に対抗して、組織論を「階級形
成論」として提出したとき、それは党組織論
をばらむもの、あるいは暗示するものという

あってはならぬ党」として「自立せる大衆組
織」の階級形成途上の「党」との緊張関係の
代用を行ったと言える。だが社学同が再建さ
れ、全国組織として革共同に対立するや、革
共同は負の党として利用することは不可能と
なる。

大衆にとっての「党」、大衆にとっての「
前衛」であることがこの次元の党派闘争にと
って、なんら力にならないことは、この時の
社学同にとってさえ自明であったのだから、
（最近のヴ・ナロード派とは異なり）当時
「大衆運動主義でなにが悪い」と居直ってみ
せたとしても、その意味するものは、俗に理
解されている水準のものではなかった。

出来合いの階級を党が指導して、革命へ向
わせるというようにも、党を階級に代置して
その拡大を考えるのではなく、疑似前衛の否
定（真正前衛の建設）から前衛の否定へと進
んだ意味は、大衆運動主義、解党主義の範囲
で理解不可能である。「私達の前に安保闘争
として端的に示された無名の大衆、プロレタ
リアとかブチ・ブルとかいった階級として未
だ形成されていないがゆえにそのような形而
上学的分類意識から無関係なところから立上
った大衆の自己権力意識の実体化されたもの

としての運動の革命化」(セクトN0・6)に注目したのも、「階級」に対する意識の注入あるいは指導ではなく、「階級」を闘いの中で創るものとして、革命を構想することを迫られていたのだと言つてよい。ブントはすでにこの時期に、他の一切の党派と異なる転換しえない党派の本質的地点に立ったのである。「前衛」を否定する「党」の誕生は、当人たちは自覚していない。「前衛」も「党」も同一のものと考えてこれまでのコミンテルン派の「党」概念の下に無自覚に言葉が使われていたため、到達した地平はまだぼんやりとして見透せてはいない。大衆の自立、労働者の階級への形成という革命の「立脚点」に立った以上、その「党」は大衆によつても、党派の完結体系によつても支えられない全くあやうい「党」がここに成立したのは、客観的事実なのである。このような党派をはたして「大衆運動主義」と単に名づけ得るであろうか。ブントにおける十余年の歴史、ブントの「大衆運動主義」を「大衆と共に闘う」などと要約できないとわれわれが主張するのも、これらの過程を踏えてのことである。

革共同に対して、大衆の名において、党派的对立を、過度に組織論の問題として行ったとき、自らの「党」としての性格が自覚されざるをえない。大衆の階級への形成に関して、もっとも先鋭な問題提起を行った「セクトN0・6」が、政治党派として、次の時代を先頭を切れなかった原因は、自らの行おうとすることを「大衆による党の粉碎」にあるとするならば自己の組織の否定となり、大衆の政治同盟を組織しようとしたのであれば、そのような大衆の自立的組織化をうながさうとする党派の成立はいかなる位置を持つかを明らかにすることを要求されるというジレンマを解くことができなかつたからである。このジレンマは大衆の名において語らないことによつてはじめて解けるものであつたのである。

5. 革命を実行する大衆の眼から、「革命」と「党」を徹底して視た時、それがすでに大衆として視るのではなく、「党」として視ているのだという矛盾は、以上の過程を通じてのことによつて、日本新左翼の地平を、スターリニズム・トロツキズムに対して切り開く過程として展開しえたのである。われわれが前号に予定していた「マルクス・スターリン主義に対する新左翼の地平」はこの時に、確立し

念ながら理論の問題としてみるかぎりは事実なのである。以上われわれは、ブント残党が「党」と「大衆」のハザマにおいて、革共同・革マル主義との対立の中で、自己の存立の根拠を求めて、ブント主義を顕在化せしめていった過程を実践との関係でなく、論理の自己展開の内

たのであり、ブントは不滅のものとなつたのである。

この到達点自身がブント残党の中に持ちこんだ矛盾は、社学同内の「セクトN0・6」派と「蜂起」派の対立となつた。だがこの対立は、現在の新左翼分派闘争とはやや異つてゐる。この両者は理論的に相手と論争を展開しケンカ別れをしたという過程をほとんど踏んでいない。たしか各々一通づつの批判声明をなげ合つただけで理論争らしきものは行われていない。そして学生運動の実践過程から言えば、もはや「学生運動をやるつもり」のなかつた「セクトN0・6」派が学生運動から手を引き、学生運動をやる気だつた「蜂起」派へその大衆基盤を平和移譲したにすぎない。では対立がないかというそれははっきりと存在した。現在「叛旗」派諸君は「セクトN0・6」の後継者であると思つてゐるようであるが、「叛旗」派とわれわれの対立のごときもが、「セクトN0・6」派と「蜂起」派の対立であつたのでもない。われわれと遊撃派の対立のごときでもない。

当時の対立においては、両者とも、相手の中に革マル主義をかぎつけて非難したのである。「疑似前衛」「前衛病患者」批判は行つ

ても、前衛党建設は否定しない「蜂起」派の中に「前衛主義」||革マル主義をかぎつけて、「蜂起」派の延長上に再び前衛主義がはびこること「セクトN0・6」派は危惧をいだいた。これに対し、一つの「党派」が自らを大衆であると言ふことによつて、自らを党派として意識せず、組織されない大衆を放置することに、大衆から離れた密教集団化を「セクトN0・6」派の社学同に感じた「蜂起」派と対立が成立した。「党」と「大衆」の独自の組織化構造と関係を明確にすることなしには、この擬制的対立は解けることはなく、この時の互いの到達点からは、互いの道をさらに歩む以外にはこの対立を止揚することは不可能だつたと言ひようがない。

その後の全共闘の運動を見るかぎり、「セクトN0・6」はあまりに早すぎたのであり、全共闘による諸党派の無力化といわゆる「自己権力」の相貌をみることなしには「蜂起」派の「階級としての形成と党の組織の関係」は再建社学同の達した地平の上で構成することとは困難であり、前衛主義への逆転を防ぐことはできなかつた結果論としては言えよう。しかしながら、この時の無自覚な論争の水

準をその後の新左翼が超えていないことは残念な

系をはずして開示された、この時代の社学同の諸理論と諸実践の領域は、これまで述べてきた組織論の一点に止まるものでもちろんない。さらに、われわれが追つてきた問題にせよ、当時の状況に関する予備知識のない読者諸君にとっては、理解しがたいことかもしれない。なぜならば、新左翼は一つの歴史的与件として、現在われわれの前にあり、新左翼の地平がある意味では、常識の範囲となり、逆に特殊なおもいを込めて主張されたことが、もはや標準化された新左翼世界の概念として以上には伝わりにくくなつてゐるからである。歴史の一回性が経験の伝達を困難にするのはあたり前といえはあたり前だが、それをくぐつたはずの新左翼の指導者たちの無恥には、やはり腹が立つものである。

だが、大衆の権力への形成の裏側にある、党の根拠については、この時の論争においても、宇野理論によつて革命が語られないところ

に存在し、しかも語られた部分によつて規定を受けているという構造にも似て、やはり語られないところが在つた。だからこそ、宇野理論と同様にブント党組織論もまた、誤解の中で隠された姿で存在しつづけたのである。「セクトN0・6」にみられた大衆闘争の組織としては致命的な「やりたい者だけが、勝手にやる」「閉鎖性」はそれを「党」としてみるかぎり当然の「閉鎖性」であり、その閉鎖性は大衆の能動性、創造性を前提にして成立しうるものであり、大衆に対してひげめなく誇示しうるものである。

第一次ブントからみられたこのような「ブントのスタイル」はこれ以後も闘争の諸局面にくりかえし現れた。それはブントの「先駆性」「戦闘性」で合理化するという誤まりを犯しつづけてきたが、この時の「おれたちは

やりたいから、やっているのだ」というのが最も正しい理由であったのであり、「党」の本音がここにあることの自覚は、この時の「セクトN.O.6」にはじめて現われたのである。かれらは「党の持つ私的性格」としては自覚せず、「大衆の自律性」と混同していたが、この意義は大きい。

他方一〇〇%マルクス・レーニン主義を自称した「蜂起」派が言葉の上の主張とはウラハラに、大衆の前衛であること以上に、「党」を位置づけられなかったという逆説は、革命を大衆の事業であると開放すればするほど、「党」に要請される「閉鎖性」の構造がいかに視えにくいものであるかを、これらのエピソードは物語るのである。

この問題を再建社学同時代において、これ以上論ずることは、歴史の偽造となるのでこれまでとし、さらなるブントの歩みの中で論じていこうと思う。

最初、この章においては、ブント解体期の全期間を追いつつ、六〇年代後半を準備した問題の端緒を全般的に叙述し、第二次同盟直前までいたる予定であったのだが、革共同との対立期に限定されてしまった。だから副題の「ブントの青年期」は未だ終焉しな。

しかし予定された期間の問題点は、この時期に出つくした感があるので、内容的にみれば、当初の予定とそう狂ってはいない。そして関西ブントについては、この問題に関する限り、ずっと後の赤軍派の登場において初めて直面したのであって、この回にはとり上げる必要はないと判断される。むしろ関西ブントの問題については、別の角度から、機会があればとり上げてみたいと考えている。それは東京あるいは、中央ブントに対する関西ブントとしてである。

遠方からの手紙

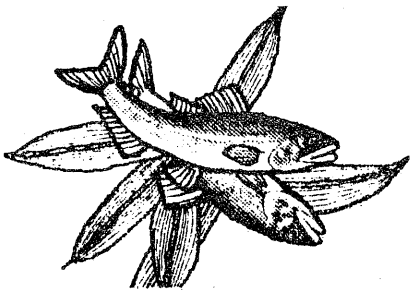
「遠方から」は、雑誌としても「主張」としてもあいかわらず無視し続けられている。ある関西の友人が「遠方から」創刊号が出て以来度々関西の「親分衆」をつかまえてはどぼけて、「松本が変なことを言い出したが、どう思うか」と水を向けたという。しかし、彼らは必死になって、そんなものが出たことを知らないかのごとくふるまうのに一致して努力するらしい。第二号で正木が整理したように、「遠方から」に対する「反応」は今のところ「読書新聞的、正しい、批判」のようなパ

ターンか、もしくは「夕駄派」的読解力不足の読み方からする批判しか出ていない。ガゲキ派のしきたりに従った真正面からの論評もしくは批判が皆無なのである。どうも、このような無反応を見ているとふと、「もしかしたら、世界はなくなってしまうたのではないのか」という幻覚におそわれることがある。それほど今まで我々が生きてきた世界は生々しかった。しかし、ソフトスタリニストの才子たちや、平岡クンはたまた「腹腹時計」派の反応は別にしても、「遠方から」が今特殊な読まれ方をしているのはたしかだ。書店に置いたものが静かに確実に売れることや、各号発行から大分後になってから事務所に郵送依頼の手紙が来たり、我々が現場の活動家に直接手渡したものに對する一種の反応、これらは殺人鬼・長谷川議員の高位当選とともに不気味なことだ。だが、しばらくの間は我々が本気になって語りかければ、その人がこの地上から消滅してしまふ、という珍事はたえないだろう。そのようにして、この間いかに多くの友人たちを失ったかを考えると慚愧の念にたえられぬ。かくして、我々は長谷川議員以上の「不可視の殺人鬼」と陰口をたたかれるにまでなってしまった。(新選組)

日本国家物語

講談「二・二六事件」

咲谷 漠



二・二六事件は北一輝の流れをくむ青年将校団がひきおこしたのだが、この事件の主役はむしろ今上天皇自身だったという見方もなりたつ。けれどもこれらはいずれも事態の一面の真実であるにすぎない。決起将校と今上天皇をいわば磁場の両極として事件の四日間を揺れ動き、自らを鮮明に自覚形成しようとして結局挫折したのは実は「日本国家」という「人格」であった。日本国家こそがまさにこの事件の主人公であった。

近代国家の政治的・階級的な性格は、権力の当事者にとっても大衆にとってもいつもはつきり見えていたわけではない。いや通常はむしろその方が国家権力にとって有利である。

自ら非政治的・非階級的と称することは最もありふれた「政治」なのだが、このからくりは通常は大衆には「見えない」。そして見えないものを見るようにさせるのは、まさに革命という国家の分裂をおいて他にはない。このことは大衆にとってのみならず、なかならず国家自らにとっても同様だ。「なんじ自らを知れ」というが人は真空のなかで自分を知らないのでない。いつも自分の「否定」を面前に見いだすことを通じて逆に自らを知るにいたるしかないのである。

近代国家は国家権力としてはまさに国内外の政治対立を通じてその形を変えうる。

とりわけ革命期には大衆の運動が自らを階級に形成するに依りて国家権力もまた自らを(再)形成するのであり、これはいわば権力側における階級の形成である。しかし、左右の少数共同体の革命家たちは、自らの集団の意識の純度を最初から前提しうることをもって、彼らの敵・国家権力もまた同様なのだと錯覚する。

(「遠方から」二号)

「革命とは国家権力の問題だ」というレーニンの言葉もありきたりな戦略論のレベルを越えて理解しなければならぬ。大衆も国家権力もともに革命の諸対立の渦中にほろろ

されることよってまさにまざまざと「国家」をみる。人が「国家論」を書きうるのは、いつも革命から逆算してのことである。

* * *

二・二六事件がある種の「革命」であった意味も以上の点にある。これは明治以降の日本国家の秘密を暴露すると同時にそれ以後の昭和ファシズム国家の形成をも決定したという意味で、この時期にぎりぎり革命に接近した——おそらく唯一の——事件であった。

「昭和維新」や「革命」は文字通り決起将校たちの合言葉だったけれども、ここでいう革命とは彼らの意図した意味での革命ではない。軍という国家権力の中枢で生じた二・二六は、しかし「国家」をめぐる攻防にあれかこれかの結着をつけることなく終りをとげた。これは文字通りに革命ではなく、また「ファシズム革命」でもなかった。むしろ本質的なことは二・二六の四日間に国家権力内部に生じた諸対立と混乱そのもののうちに見える。ここで日本国家は、登場人物の相互関係のすべてを通じてその諸側面をまぎれもなく照射されたのである。ささいなエピソードの

ドの一つ一つがそれなりに「日本国家」という主人公の分身を演じた——明治維新以降の日本の革命史のうちでも、これは稀有のことだった。

たとえば、当時決起将校にもその敵側にも最も奇怪なエピソードと思われたものに、歩三（陸軍第一師団歩兵三連隊）の新井中尉の行動がある。彼は二八日の午後叛乱軍にたいする警備位置を突如として離れ、指揮下の中隊をひきつれて靖国神社の参拝に出かけてしまった。新井といえれば歩三の維新派将校の一人として知られていた。二・二六の決起にたいしては安藤とともに自重派の中心だったが、二二日に安藤が参加を決めたためいわばおいてきぼりを食った形でこの四日間は叛乱軍と対峙する位置におかれたのである。だが、叛乱した「元同志」との関係から彼は叛乱渦中の決起将校との様々な接触にあたってきたのであり、だから二八日の戦線離脱行為は中間主義者の動揺ともみられたろうし、とりわけ軍首脳部にとっては叛乱側の陽動作戦のごとくに受けとられたのだった。

けれども、新井中尉の行為自体はあくまで一つのエピソードにすぎなかった。彼自身はこのために禁錮六年の刑を食らうことになる

が、彼の行動が事件の推移に与えた影響などはとるにたりない。このエピソードの重要性はむしろ決定的に彼自身の内面にあった。つまり新井にとってこの靖国参りは「抗議デモ」として意図されていたのである。

軍隊は命令には服従する。命令とあれば如何なる命令にも服従する。事件勃発以来、随分おかしいとは思いつつも、連隊長も大隊長も「命令とあれば致し方ない」と服従してきた。これが不逞の徒をして増長させたのだ。軍隊の服従にも限度はある。われわれは何時迄も出鱈目な命令には服従して居れぬ。それを実際に目に見せてかれら（軍首脳）の反省を図らねばならぬ。

ようやく決心がついたわたくしは、部隊を集め、靖国神社へ出発した。そしてそれは一種のデモの意味があるので、二十分程歩くと直ぐに休憩し大隊本部へ靖国神社へ赴く旨を報告したのである。

（『日本を震撼させた四日間』）

「事件勃発以来」の軍首脳部の対応がいかに「出鱈目な」ものだったかは、いまではよ

く知られている。だが、叛乱した将校たちは別としても、事件渦中でこのでたらめさははつきりと知りこのでたらめさそのものに抗議しようとした者がここにいたのである。自分の中隊の大部分をかつての同志将校に連れだされたのを知った二六日の朝、軍が叛乱派に味方するにしろ敵にするにしろ「中途半端」は最悪だとすでに新井は考えていた。「かれらが身を賭し迫力によってせる以上、こちらにもまた死生を度外視した迫力によらねばならぬ」と。

是認するにも無理がある。陸軍は結束して国家を引摺らねばならぬから。それには中途半端であってはならない。少くとも決起将士同様の決意を固める必要がある。迫力と威嚇によっての対外闘争をもしなければならぬから——否認する、そこにも断乎たる決意がある。迫力によって引摺らんとするからに、われらまた武力に訴えても否認するの迫力を示さねばならぬから——。

わたくしはこの二つ以外、探るべき態度はないと信じた。

しかし事実は、新井の決意したラジカルな二分法に「軍」は従わなかった。事件に出くわした朝の「軍」の姿を木戸幸一は次のように語る——

「川島陸相は午前九時に参内して陛下に奏上した。下るさい、御殿の廊下で陛下のお部屋にいくぼくと出会った。川島は顔面蒼白で、足元がさだまらず、ふらりふらりと歩いていて、ぼくの顔を見ても、目がうつろでぼくが見えないようであった。これが陸軍大將で陸軍大臣かと思うと、情けないのとおりこして怒りだけがこった」。結局、事件の四日間を通じて軍はこうしていたらくをさらし続けることになるのだが、しかし四日間「足元がさだまらずふらりふらり」と歩いたのはたんに軍部中央ということであつたらうか。むしろそれはこの時点での「日本国家」そのものの姿ではなかったか。国家は身内から出た叛乱軍のラジカルな鏡に自分を映して動揺することによって、自らを衆目にさらしたのだ。新井中尉の行動もまたその二者択一の問題設定によって叛乱軍と同じように国家の「でたらめさ」を映しだした。磯部や栗原からすれば新井は裏切り者だったろうが、しかし「かれらも決死の覚悟であればわれまた決死の覚悟で」という決意によって、

新井中尉もまたまぎれもなく磯部らの運動の圏内にいたことを示したのである。

* * *

いまでは、事件渦中の軍首脳のでたらめさや卑劣さを非難する声は多い。この点で大部分の評者は青年将校たちの倫理的な軍部非難に同調する。だが、軍もまた国家権力である以上、権力にたいする道徳的感情的批判は通常政治的には無意味である。権力はそのでたらめさ自体をおのが力として生きつづける。二・二六の叛乱に出くわした瞬間から、マキヤベリズムとでたらめさとが混在した権力の対応が開始された。

決起の趣旨に就ては天聴に達せられあり諸子の行動は国体顕現の至情に基くものと認む

之以外は一つに大御心に俟つ

これは二六日の午後出された有名な「陸軍大臣告示」の一部である。字義通りに受けとれば、決起ははやくも「是認」されたことになり、事実、決起側もそのように受けとって

いる。「陸軍当局は、吾人の行動を是認し、まさに維新に入らんとせり。叛軍ならざる理由、一、決起の趣旨に於て然り、二、陸軍大臣告示は吾人の行動を是認せり」(安藤輝三遺書)。新井中尉が「わたくしよりはやっただ人達の方が正しかった」と軍当局が判断したのだと思つたのもこのときである。

だが実際には、軍当局の「ベテン」はこの文書からすではじまっていた。「一つに大御心にまつ」といいながら、彼らは「大御心」が断固として「叛乱軍討伐」に決っていることをすでに知っていた。この日の午前、川島陸相が「ふらりふらりと」天皇のもとから下ってきたのも、まさに天皇のこの意志を知つた結果であった。だから、軍当局の態度は天皇の意志へのベテンであり、また他方で決起軍にたいしては即時撤兵させるための口実をつくるというものだった。実際、告示を決起将校に伝えた山下奉文は、「是認か」と迫る磯部らにむかつて「撤兵」を説得するだけであつた。「強力内閣」の実現という目標で決起側と同調するかにみえた真崎ら軍首脳の間は、ここではすでにあとかたもない。「これらも決死われまた決死」という新井のラヂカリズムからいえば、これはまさに最低の「

中途半端」であつた。

けれども、くりかえしいうが、でたらめさもまた権力の力である。叛乱にたいする軍当局の対応が、有効なマキャベリズムとして叛乱軍をベテンにかけ腰くだけにするものであつても、国家権力にとっては何の不思議もない。だが、彼らが心底つかむことができなかったのは、青年将校運動こそまさに時代の運命だつたという事実である。五・一五事件は四年前のことだつたが、たとえればあの程度の決起であれば、軍権力は手もなくこれをだますことが出来たであろう。実際、五・一五は「君側の奸」を除いたのち、軍当局との交渉以前に当局に自首してきたのだつた。けれども、青年将校運動は大川周明・軍幕僚派の運動から自立してすでに五年になつており、とりわけこの年月は、皇軍一体という伝統のなかで生れた革新運動を他ならぬ軍自体の分裂を賭ける地点にまで追い込んでいくものだつた。「軍隊は国家権力の実体なり、故に、国家を分裂せしめんと欲せば軍隊を奪ふべく、軍隊の革命が国家其の者の革命なり」——すでに昭和二年西田流はこのようにいつていたが、北・西田流の軍事クーデタ路線はとらなかつた青年将校たちもその後事実そのものの

力に押されて、「国家を分裂せしめんと欲せば軍隊を分裂せしむべし」という地点にいまや事実上立たされていた。事件勃発とともに大部分の軍人たちの合言葉となつた「皇軍相撃」の防止というスローガンは青年将校運動の歴史が煮つまつた地点をはっきりと照射している。実際、この四日間に決起派にたえずつきまとはなれなかつたのも、自ら始めてしまった皇軍の分裂・かの「大権私議」にどう始末をつけるかというさし迫つた問いであつた。そして、決起派のうち磯部浅一に代表される翼はこの「皇軍一体」の呪縛を破つてもっと先へ進もうとしてあがきつづけたのである。たとえば二七日朝決起派内部の激論はこうだ。

村中

「同志部隊を歩一に引揚げよう。皇軍相撃はなんといつてもできぬ」

磯部

「皇軍相撃がなんだ。相撃はむしろ革命の原則ではないか、もし同志が引きあげるならば、余一人に」とどまりて戦死する」

(磯部「遺書」)

こうして、国家軍の内部分裂・皇軍相撃

を不可避とするような革新運動の歴史をぎりぎり背負つて決起した者たちをまえにしては、大臣告示のベテンなどは一片の空証文にすぎないものとなる。軍当局得意とする「事をあらだてない」政治はここに通用しなくなる。これが通常ならば「国体顕現の至情に基づくもの」という是認は手もなく叛乱を散らすことができたであろう。だが、通常国家権力が事とするあらゆるマキャベリズムの政治、あるいは人脈にもとづくなあなあ主義のカセを振り切つて、政治を日常とは全く別の流れへ解放するものこそまさに革命である。二六日の朝軍当局の手なれた政治が拒否されたとき、事態は新井のいう「かれらも決死、われもまた決死」というラジカルな対立にむけて解きはなれたのであつた。だからここから始まる軍当局の混乱と動揺も革命にとっては極めて「正常」な現象である。これは彼らの無能や卑劣さを意味するのではなく、まさに「決死」の敵対者に直面して「国家」が動転しつ

つ再形成される過程を意味したのである。日本国家を主人公とするドラマがこうして開幕する。

「否認する、そこにも断乎たる決意がある」と新井中尉は考えたのだが、実は反叛軍の「身命を賭した迫力」にも対応する「迫力」をもつて否認の「決意」を表明しつづけた者が一人はいた——他ならぬ天皇自身である。時の侍従武官長本庄の日記は次のような言葉を記録している。

朕が股肱の老臣を殺戮す、此の如き兇暴の將校等、其精神に於ても何の怒すべきものありや。

朕が最も信頼せる老臣を悉く倒すは、真綿にて朕が首を締むるも等しき行為なり。朕自ら近衛師団を率ひ、此(叛乱軍)が鎮定に当らん。

いまでは、「断固討伐」の天皇の意志のこととはよく知られている。だが二・二六の四日間にあつては新井たちにはこれは漢とした風聞以上のものではなく、天皇の国家の意志は天皇自身から叛軍そのものにいたる中広イスベクトルを揺れ動くものとしてしか見えてはこなかつた。明治維新以来の重臣たちがこしらえた日本国家の歴史は、「万世一系の天皇これを統治す」という「たてまえ」の裏です

でに幾重もの権力機構・統治機構を確立していた。戦後天皇が語つたところによれば、これら機関の合法的な決定は天皇の意志のいかんを問はず裁可すべきものであつた。ファシズム国家の暴徒にたいしても自らが「余りに立憲的に処置」したために介入することができなかつたということになる。一口に立憲君主としての天皇である。竹山道雄による「機関説的天皇制」であり、これは「旧来の元老・重臣・政党・官僚・軍閥・財閥のヒエラルヒーによる「天皇制」であり、これは汚職をしたり軍縮をしたりした」(『昭和の精神史』)。二・二六の四日間、「陛下はまたしばしば川島陸軍大臣を呼ばれて、『一時間の内に暴徒を鎮座せよ』と言われ、十五分ばかり経つと、『もう撃ち始めたか』と仰せられて、終始武官長を見におやりになるといふ具合」(『西園寺公と政局』)だつたが、これは立憲君主としては出すぎた振舞いだともみられようが、しかし天皇のこの焦慮と「暴徒」との間が「機関説的天皇制」の担い手たちの厚い壁にはばまれていた事実の方がもっと重大な真実であつた。

しかし他方この機関説の実行者たちが同時に「たてまえ」としては「現人神」としての

天皇を戴くことが不可欠だった。この天皇は「御親政によって民と直結して、平等な民族共同体の首長であるべきであり、国難を克服する、国家の一元的意志の体现者だった」（竹山道雄）。そして時代はまさに「国難」の時代だった。他ならぬ軍当局の音頭でかかる天皇をまつり上げる運動「国体明徴運動」が全国を席捲してからまだ一年とたっていない。「国体は倫理的事実・歴史的事実にして憲法の制度にあらず」（美濃部達吉）という明治国家の担い手たちに共通の承解事項、その「本音」は、「国体こそが一切の法、一切の制度組織法律典章が派生し発源する原理」だとするキャンペーンによって徹底的にあげきたてられ征伐された。事実これは「たてまえ」による——「本音」にたいする——「合法無血のクーデタ」であったかも知れぬ。

二・二六の将校たちを育てた軍隊こそは、明治以降の日本国家のあり方・「二重の天皇制」のまさに軍隊版であった。当時の国家権力における「軍部」の比重からいえば軍隊こそ日本国家の縮図だといえることができた。藩閥にとられず陸大出の軍官僚（幕僚）による軍の統制と管理がすでに確立されており、これは帝大出官僚による国家機構の掌握と対

応する事実だった。しかし他方で幕僚機構が軍全体の統合のために「皇軍」の観念で兵士たちを教育する必要もまた他の国家機構の場合と全く同様であった。「教育勅語」に対応して、軍は独自の「軍人勅諭」をもち「天皇は陸海軍を統帥す」という憲法の規定のもとで「世論に惑はず政治に拘らず只々一途に己が自分の忠節を守」ることが要求されるのである。

問 青年将校などには、世間的接触がな
いために、民衆の生活感情を無視した点
がずい分あるようだ。

答 世間的に最も多く信ぜられてゐる考
へだが、事実はこれと反対である。我々
将校程世間的接触の多いものはない。論
より証拠に、我々が毎年十万以上の壮丁
を入れてそれを直接教育する。彼らは世
間の総ての職業を網羅して居る。我々軍
人は戦争術の技師ではない。だから兵隊
に軍隊の技術を教える為めの将校ではな
い。それに兵隊の凡ゆる階級の者が持つ
思想、信念、境遇を体得しなければ理想
的な教育が出来ぬ。況んや我々青年将校
が此の一般社会から入って来る兵卒の演

習場に於ても共に露営し、共に同じ飯を
食ひ、泥まみれになって居る中に、彼等
の思想感情を知り、彼等の悩を感得、苦
しみを知る訳だ。従って民衆の生活感情
や思想内容に対する知識というものは非
常に強いものだ。国民総てを指導しなけ
ればならぬ確信をもって、ものを非常に
研究して居り、却って世間一般の人より
も色々知って居る。

（「青年将校運動とは何か」）

これは事件直前のインタビューの一節だが
ここでいう青年将校による兵隊教育こそは「
戦争術」ではなく「天皇の赤子」たることを
自覚させる内容のものであった。「天皇は、
国民全体にむかってこそ、絶対的権威・絶対
的主体としてあらわれ、初等・中等の国民教
育、特に軍隊教育は、天皇のこの性格を国民
の中に徹底してくみこませ、ほとんど国民の
第二の天性に仕たてあげるほど強力に作用し
た」（久野収）。逆にいえばこの軍隊教育を
になう隊付青年将校こそは「天皇の赤子」と
いう信念を文字通り「第二の天性」に仕たて
あげられた者たちだったといえることができる。
それゆえ、まさにこれら将校たちを主体とし

た革新運動がなによりもまず「現人神」のた
てまえを「本音」として信ずることにともとづ
けられたのは当然であった。「所謂維新なる
もの真髓は、先づ第一に我々が現人神陛下
の子であり、赤子であると云ふ自覚、信仰で
ある」という結論であります。青年将校運動
の草分の一人大岸頼好大尉がこう証言してい
る。

したがって軍の幕僚エリートたちが事実上
「機関説天皇制」の機構を運営しながら「皇
軍一体」の名目でこれら青年将校運動をも掌
握することにはかえって次第に無理が目立っ
てくる。いわゆる皇軍派と統制派幕僚との暗
闘の一端はにわか表面に出たのである。

こうして、軍隊こそはときの日本国家の縮
図であった。幕僚——隊付将校・兵士という
形で明治国家の支配機構が軍部のうちで典型
的に開花したというだけではない。明治国家
の「二重の天皇制」がその微妙なバランスを
失いつつあったという事実もまた他ならぬ「
皇軍」内部の事実であった。とりわけ、本来
なら国民に密着してこの力によって明治国家
のバランスシートに結着をつけるべき政党デ
モクラシーは、すでにろくろ有様もみせられ
ずに自滅してしまっていた。だから、軍内に

あって「凡ゆる階級の者が持つ思想・信念・
境遇を体得しなければ」ならぬ隊付将校の革
新運動は、明治以来の日本国家に「下から」
結着をつけるという途方もない仕事で事実上
負わされるようになっていた。皇軍一体から
皇軍相撃へいま一步のところ立っていたの
が「軍部」であり、それはまた軍の形をとっ
た日本国家の姿でもあった。

* * *

「いまから思ふと、あれは、いはば天皇が
天皇にむかって叛乱したやうな事件だった」。日
戦後になって竹山道雄がこういっている。日
本国家の「二重の天皇制」のからくりについ
ては、当時も北一輝はじめ多くの者たちがこ
れを知っていたであろう。だが事実の力をも
つてこの秘密を暴露したのはまさに二・二六
事件のなりゆきであった。

もともと青年将校の革新運動は大別して北
・西田系だとしてもかつて西田の願った「ク
ーデッタ!!」の道からはずれてきている。次
のような発言は多かれ少なかれ彼らの心底を
占めてきた考えであったろう。

問 神兵隊（事件）については、特に何
を考えるか。

答 あれはファッショだ。日本の国体観
念を錯覚した欧化思想である。その改造
の方法に国家に攪乱を起して戒厳令を敷
かさうとした如き思想は以ての外だと思
ふ。ファッショの下に国民暴動を煽動し
て戒厳令を奏請すると云うことは陛下を
だまし奏る遣り方だ。大権強要に属する。
むしろ自分がせるだけの事をやって、陛
下の前にひれふすと言ふ態度でなければ
ならないと思ふ。

（「青年将校運動とは何か」）

けれども、叛乱が国家のふところ深く切り
込めばそれだけに、「やるだけの事をやって
陛下の前にひれふす」という態度」の非現実性
は目にみえてくる。国家権力にたいする倫理
的批判の徹底は本人たちの意識を越えて政治
的意味をおびるようになってしまふ。倫理と
政治の混交は時代の運命だったからだ。大岸
大尉につながる地方の将校たちと磯部ら「皇
軍相撃」の暗闘のまった中にある者との差
異として、倫理と政治の相剋は青年将校運動
自身に内面化される。たしかに、伊藤博文以

来「政治」をになったもの——「機関説的天皇制」の不在の手たち——の系列を磯部はまず切った。二・二六の殺害者リストはいわば「元老・重臣」の系譜に集中しており、彼らは「君側の奸」をいわば象徴的に切ったのである。だが、日本国家はすでに「君側の奸」という「政治」を切除することで天皇の身体と直接対面できるなどという段階をはるかに越えていた。君側の奸を切った瞬間から磯部らが対応に忙殺されたのもいかなる意味でも天皇などではなく、天皇の機関をになってきたあらゆるスペクトルのうごりむぞりたちであった。「重臣」を切ることで彼らは「政治」を、国家権力をとりのけたかに思ったのだが、実はこうしてはじめて彼らは「国家権力」そのものに対面することになったのである。だから、政治と倫理の位置づけは彼ら自身のうちで瞬時にして逆転する。

荒木大将 「大権を私議するようなことを君らが言うならば、吾輩は断然意見を異にする、お上がどれだけ、御軫念になつてゐるか考えてみよ」

磯部 「なにが大権私議だ、この国家重大の時局に、国家のためにこの人の出馬

を希望するという赤誠国民の希望が、なぜ大権私議か。君国のために真人物を推すことは赤子の道ではないか。」

(磯部「遺書」)

ここでは、「やるだけの事をやって陛下の前にひれふす」ことを主張するのが逆に「軍閥」の側となっている。まさに「頭から陛下をカブって大上段で打ち下ろすような態度」をとったのは荒木の方であり、逆に磯部は事実上「大権強要」の位置におしやられる——「なにが大権私議だ」。

おそらく磯部らとその同調者とみられた荒木らとの構図が最初からこのように逆転したものとすべきばりとうち出されたのなら、叛乱は「皇軍相撃」という運命を一挙に鮮明にしたはずだ。それが瞬時に「陛下の前にひれふす」ことになるか「クーデッタ!!」にすすむかは別として、日本国家は自らを真正正銘の権力と自覚して磯部らの前にたつて結着を迫つたろう。しかし事実上は逆に権力は自らを陰すナニワブツで対応する。荒木は「大権」が決定的に「叛徒鎮圧」なのをすでによく知っており磯部らの「大権私議」は疑いようがないにもかかわらず、この事実をは

二六日)。
二六日朝出勤せし將校以下は第一師団麹町地区警備隊長小藤大佐の指揮下に在りて行動すべし(「戒作命第七号」、二七日午後七時)。

二七日といえはすでにこの朝占拠部隊への天皇の撤退命令(「奉勅命令」——天皇の直接命令)が「陛下には至極御満足」のうちに裁下されていた。叛乱部隊を「治安維持」に任ずるといふのは文字通り奇怪な命令であったがこれもまた「口実」と意識されていたわけではない。「赤色分子等の盲動」を未然に防ぐためと理屈づけられたのみか、第一師団から叛乱軍へ食糧薪炭が補給され、歩三では機関銃隊の一部を送って決起部隊の増強までやっている。「今や決起將士を目する連隊一般の態度は、英雄のそれにも近かった」(新井勲)。しかし現実には両者は対峙して布陣しているのだから、これらの構図は新井のよりなりゴリストには我慢のならぬものにみえたのも当然であった。

説得もできなければ、激励もできない。お互いが守備位置で頑張るだけなのであ

る。食糧薪炭を補給しながら、同じ部隊同士が睨み合っているのである。世の中にこんな不合理が何処にあるか。

けれども「こんな不合理」も実は叛乱の一つのありうべき結果であった。それというのも、これは権力の真正正銘のマキャベリズムというべきものが叛乱へき頭に「宮中」で挫折してしまつた結果なのであった。中橋中尉による半蔵門の占拠が失敗したという事実もあるがそのことではない。事件の朝「とうとうやったか、お前たちの心はヨオクわかるとる、ヨオクわかるとる」といいながら決起軍に乗り込んだ真崎大将は、決起を圧力とする一つの政治方針をただちに実行に移そうとした。彼の意を受けた川島陸相と伏見宮海軍軍令部総長の二人を別々に宮中に送り込んで、「強力内閣」構想を天皇におしつけることであった。力を背景としてこれは典型的な宮廷革命の行であり、しかも川島と伏見宮といえは陸海軍の公式の意見というに等しい。だが、この強要は立憲君主の習慣に反して天皇自身によって断固として拒否される。「陸軍大臣は、内閣をつくることまでいわないでよかろう。それより叛徒をすみやかに鎮

きりと云うことができない。荒木ら「軍」にこれをはつきりと云わせるためにのみ叛乱の四日間は費やされたようなものであった。

けれどもくりかえすがこれも革命にとってきわめて「正常な」事のなりゆきである。国家に権力として真実口を割らせるのに四日間はむしろ短かすぎるほどだ。それというのも荒木らが「大臣告示」のはじめからとりつづけた「ベテン」は、権力の意識されたマキャベリズムとして機能することはできなかった。ベテンを字義通りに受けとる下地が軍そのものの中央に現に存在したからである。叛乱にたいする戒厳令本部の司令官からして「本来自分は彼らの行動をかならずしも否認せざるものなり」と公言していた。しかしもとより叛乱側へ寝返えるというのではない。だから事態は一まず典型的に「猶予」の構図におちついた。叛乱軍はその占拠位置をそのままにして正式に第一師団隷下に編入され、この位置づけは戒厳令が布告されても変らなかつた。「命令」は次のようにいう。

歩兵第三連隊長は本朝来行動しある部隊を併せ指揮し担任警備地区を整備し、治安維持に任ずべし(「師戦警第一号」)

庄するほうだが、先決ではないか」。こうして、宮中から再び決起側との会見に帰ってきた真崎・荒木らはすでにして政治的には無でしかなかつたのである。荒木にむかつて「何が大権私議だ」と磯部が叫んだとき、彼は古い国家革新運動の亡霊に呼びかけていたのであり、荒木にしてみれば磯部の叫びはまさについ先刻までの自らの姿勢に他ならなかつた。「われわれ軍事参議官は、お上のご諮詢ありてはじめて働くものにして他に職権なし。ただ軍の長老として座視するに忍びず道徳的に働くのみ」という真崎の発言は、つい先刻までの自分自身に投げつけられたものだった。これら長老たちに「ダニのごとく喰いついて、強迫、煽動、いかなる手段をとつてもいいから、これと離れねばよかつたのだ」と後に磯部はくやんだけれども、それはできたとしても昨日の形骸に喰いつくことにすぎなかつたであろう。磯部はまた荒木ら居並ぶ大将連が「すっかり吾人の国体信念にまいった様子が見えた」と書くけれども、彼らが「まいった」のは全く別のもの、磯部らの国体信念がいだく「天皇」とは別のもう一つの「天皇」にたいしてであった。政治ではつい先刻も遠い昔もともに等しく過去であり過

きてしまった事柄に属する。旧来の青年将校運動からすれば叛乱はこの瞬間に終わったといえようが、しかし彼らが思いこんでいたのとは別の叛乱がここからまさに解禁されたのだということも出来る。「何が大権私議だ」「皇軍相撃がなんだ」という磯部の突出は、なによりも倫理的な運動だと思ひこんできた「革命」がそれ自体のうちに逆転されたことを象徴的に示すものであった。

だがことわるまでもなく真崎・荒木らの挫折は実際には磯部ら叛乱将校側の足ぶみをも結果した。だからこの結果「世の中にこんな不合理が何処にあるか」とみえた事態も叛乱突出後にもたらされた一種の無権力状態を意味したのである。無重力状態に似た状況のなかで人々は無秩序に動転した——叛乱将校がとりわけそうであった。国家権力のこの空白状態の一瞬はそれでは次にどのように新たな日本国家を再形成させることになるであろうか。

* * *

たしかに二・二六事件は「天皇が天皇にむかって叛乱した」という事件であったが、し

かしこれは「いまから思うと」そうだということであって、事件の主役たちは四日間をぼんやりされあがきまわることを通じて次第にこの核心を探りあてていったのである。

青年将校運動の歴史はその共同観念からいえば「現人神陛下の子であり赤子であると云ふ自覚・信仰」を凝縮していく過程であったが、ここで彼らにとって「天皇」とは決してシンボルではなく肉体をもった天皇その人を不可欠とする観念であった。「天皇大権は玉体と不二一体のもの」(磯部)だ。「国家改造と云ふ事は、臣下として申上ぐべき事ではなく、一に上御一人の御事に掛って居る」と考えられるような「上御一人」であった。これに反して天皇をたんに国の統一、国体のシンボルとするのはまさに「重臣、軍閥、……」等の「君側の奸」の方だと考えられた。だから事件の四日間に天皇自身の意志をもち伝えられてもこれを「君側の奸」の陰謀と受けとる素地が青年将校たちにはあったのである。いくら彼らとて、「大臣告示」などで決起が是認されたのだと信じつづけたのではない。天皇の意志が彼らの「赤誠」を否認することなどあろうはずがないと観念されてきたために、彼らは現にそう信じたかったのである。「討

伐」の奉勅命令が出されたことが確実となった時点でも、栗原はなお彼らの天皇にすがりつこうとする。

統帥系統を通じてもう一度お上にお伺い申し上げようではないか。奉勅命令が出るとか出ないとかいいますが、いっこうわけがわからん、お伺い申し上げたいやえでわれわれの進退を決しよう。もし死を賜るということにもなれば、将校だけ自決しよう、自決するときには勅使の御差遣くらいを仰ぐようにでもなればしあわせてはいないか。

(磯部「遺書」)

切除することが赤誠の道だと青年将校は信じしたが、実は二・二六の決起に天皇がなによりも激怒したのは「朕が最も信頼せる老臣を悉く倒」されたがためであった。だから勅使の差遣による自決をという栗原らの願いにたいしても、天皇の返答は露骨だった。

自殺するならば勝手に為すべく、此の如きものに勅使など、以つての外なり。

(「本庄日記」)

「朕は汝等を股肱と頼み汝等は朕を頭首と仰ぎてそ其の親は特に深かるべき」。明治十五年にだされた「軍人勸諭」はこう述べているが、天皇へのこの「親しさ」はすでに幾重にも分断されていると青年将校たちには考えられた。安藤大尉が兵隊教育のためにやった紙芝居には、宮城に黒雲が立ちこめており、この妖雲が青年将校、兵の刀で切り散らされ太陽輝く宮城の風景が出る、というのがあったという。けれども、こうして文字通り身命を賭して「天皇」そのものにとどりつこうとした彼らだったが、しかしそこにおぼろげながら見いだしたのはいまで別人の「天皇」であった。これこそ非喜劇というしかない。

天皇のもとに一体たるは日本国家の、また軍の本義とされてきたのだが、彼らがこの天皇を再発見することは同時に似て非なる二つの天皇のラジカルな分裂を発見することでもありえなかった。二つの天皇は互いに相手のなかに自己の徹底的な「否定」をみた。軍首脳のでたらめさをふり切って、決起将校たちと天皇とが互いに反対方向から見いだしたのは、まさしく分裂せる「天皇の国家」「天皇の軍隊」さらに「天皇の国民」であった。

叛乱軍将校たちのたえまない動転がこうして開始される。天皇の意志も真崎らの工作結果についても知らされぬまゝただあの手この手の「説得」に包囲されて、彼らは「撤兵」と「決戦」の間を揺れ動いたのだが、これはラジカルに分裂対立した「天皇」の二極をめぐる動転を意味していた。それはもはや彼らの根性の弱さの故でもなければまた叛乱の戦略・戦術の問題でもない。日本国家の原理上の問題であった。青年将校運動の信仰してきた天皇の「大御心」にまかせようとする一つの極は「皇軍相撃がなんだ」、

「何が大権私議だ」というもう一方の極にたえず反転される。「自決」を天皇の意志に委ねようという栗原の提案は多数の廊下トンビたちを含めて

感涙をもって受け入れられるが、しかしただちに「自決して兵を返せば元も子もなくなる、生きて生きぬけ」という反極が頭をもたげる。二九日朝叛軍が総崩れとなったとき陸相官邸では手まわしよく自決用のガゼなどが用意されたが、「死なぬ、俺は死なんぞ」(磯部)「決起の精神をこの目で確かめたい」(村中)という声によって自決の線は一瞬のうちに崩れてしまう。彼らは軍首脳たちの出たらめなペテンを怒ったけれども、他方戒嚴司令官が後に述べたように軍のお歴々の方が彼らにだまされたというの多少とも真実であった。対立する天皇の二極をめぐって動転したのはまさに「軍」そのもの、日本国家そのものだったのだから。新井中尉の描く次のような場面は、ほとんどこの叛乱すべての縮図のように見えるのだ。

昨夜安藤と会ったあの応接室には、十数名の将校が集っていた。安藤も坂井も都築もいた。勿論見馴れぬ将校もいた。わたくしがそこに這入って行くや、忽ち数名の者から、

「何うだ、何うだ」

と、質問の矢を浴びてしまった。これは

余り様子が違う。

「奉勅命令が出たんです。お帰りになるんでしょ？」

「わたくしは慰撫的にそう云った。これはかれらには意外だったらしい。」

「何が残念だ、奉勅命令が何うしたと云うのだ、余りくだらんことを云うな」

香田大尉がこう叫んだ。かれらはまだ自分都合のよい大詔の喚発を期待しているのだ。奉勅命令については全然知らない。わたくしは茫然立っているだけであつた。

この時紺の背広の渋川が熱狂的に叫んだ。

「幕僚が悪いんです。幕僚を殺るんです」

一同は怒号の嵐に包まれた。何時の間にか野中が帰ってきた。かれは決起将校の中の一先輩である。

「野中さん、何うです」

誰かが認めて駆け寄った。それは緊張の瞬間であつた。

「委せて帰ることにした」

野中は落着いて話した。

「何うしてです」

渋川が鋭く質問した。

「兵隊が可哀想だから——」

野中の声は低かつた。

「兵隊が可哀想ですって——。全国の農民が可哀想ではないんですか」

渋川の声は噛みつくようであつた。

「そうか、俺が悪かつた——」

野中は沈痛な顔をして咳のように云つた。

一座は再び怒号の巷と化した。坂井の説得など最早問題ではなかつた。渋川は頻りに幕僚を殺れと叫び続けていた。事件はこれで結着と思つて来たのに、この様は何としたことか。全ては虚偽であつた。そこを立去るわたくしの顔面も蒼白であつたに違いない。幸樂の門を出ようとする、村中が軍服姿で「戦争だ、戦争だ」と叫んで駆け込んで来た。しかしわたくしは物を云う元気もなかつた。

「注目すべきは、天皇の権威と権力が、『顕教』と『密教』、通俗的と高等的の二様に解釈され、この二様の解釈の微妙な運営的調和の上に伊藤の作つた明治日本の国家がなりたつていたことである。顕教とは、天皇を無限の権威と権力を持つ絶対君主とみる解釈のシ

* * *

栗原が「ドウしまししょうか」と言つて磯部をふりむいてピストルを石原につきつけるが、石原は「言うことを聞かねば軍旗をもつてきて討つ」と断言する。「石原なんか叩ッ斬っちゃえ」という声が廊下で起つた。他方片倉は決起部隊の警備線を強行突破しようとして磯部にカメラを撃たれて倒れたのである。もともと彼ら参謀本部の者たちが最初から「断乎討伐」の方針をとつたのも叛乱が統帥系統を乱したからに他ならない。天皇の名において兵を動かすのが彼らの権力であり叛乱は公然とこれを犯したのである。だから石原ら「機関説天皇」の執行者は磯部らによる天皇の「私有」を撃つべき位置に本来あつた。だからまた逆に叛乱冒頭に磯部らに撃たれることにもなつたのである。天皇と天皇の対決はそのラジカルな構図をすでにここで一瞬目にみえるものとした。だが、大部分の軍首脳による同情とベテンの混合した雑踏がたちまちこの対決を飲みこんでしまつた。もとより結局は石原路線が軍を討伐の方針にまでもつていくのだが、しかしそれは叛乱当初とはちがいに、むしろ「陛下」その人の意志に押され責任もこの人に転化した形でおこなわれたものであつた。

STEM、密教とは、天皇の権威と権力を憲法その他によつて限界づけられた制限君主とみる解釈のSTEMである。国民全体には、天皇を絶対君主として信奉させ、この国民のエネルギーを国政に動員した上で、国政を運営する秘訣としては、立憲君主説、すなわち天皇国家最高機関説を採用する（久野収）。このような明治以来の日本国家権力の「微妙な調和」は、まさに二・二六叛乱によつて決定的に二極分解をとげた。逆に、二・二六は日本国家がこのとき統一の危機のせとぎわに立つていた事実をはっきりと暴露したのである。

「所謂『国体論』中の天皇とは土人部落の土偶にして却て現天皇を敵としつゝあるものなり」——かつて（明治三十九年）北一輝はここのように口をきわめて「国体論の復古的革命主義」を論難した（『国体論及び純正社会主義』）。だが、「国体論中の天皇」という土偶による「現天皇」（機関説天皇）の征伐戦を究極のところまでおしすすめたのは、他ならぬ彼の弟子たちであつた。それはかつて北が反対した「復古的革命主義」にもとづくものだった。しかし天皇による天皇への叛乱にまでつきつめられることによつて、かえつてかつて

北自身の描いた革命へ接近するものとなつた。

* * *

叛乱を是認するにしろ否認するにしろいづれも「死生を度外視した迫力にやらねばならぬ」と新井中尉は最初から決意した。この迫力を欠いた軍当局のでたらめさを、叛乱将校が四日間あのように身をさいなんだ根源だとして新井のように憎むことはできる。だが、いづれにしてもリゴリズムは避けようとするのが権力の身の処し方である。この事実を思い知らされたところに新井のエピソードの悲劇があつたし、権力の身の処し方を革命の権力問題へと解体するまさにとば口で崩れたところに叛乱本隊の悲劇もあつた。

だが、権力が自らを欺瞞なく表明しようとするかすかな流れもたしかにあることはあつた。新井が「若し鎮座せんとするならこうでなければならぬ」とした石原大佐と片倉少佐らの動きである。これは叛乱とそもものはじめからはっきりした敵対関係をつくりだした。石原は事件の朝いつのまに来たのか陸相官邸の「広間の椅子に傲然と坐している」。

事件最初の日の朝、「大佐殿の考えと私どもの考えは根本的に違つて思つて居るが、維新に対していかなる考えをお持ちですか」と栗原につめよられたとき、石原はいつている。「ぼくはよくわからん、ぼくのは軍備が充実すれば昭和維新になると言ひのだ」、と。つまり、幕僚による明確な計画・統制にもとづく国家の改造である。事実、二・二六事件の後この叛乱鎮圧の主役と認められた石原は一期「軍を一人でしよつて立っている」かにみえるような位置に立つことになる。だが、二・二六叛乱をなしくずしにつぶしたのと同じ勢力が、今度は石原のラディカリズムをも食いつぶし追放せざるにはいかなかった。こうなれば、明治以来の日本国家がみせた一瞬の裂け目はあたかも何もなかつたかのようにとりつくるわれ、しかしそれゆえに一個の膨大な「無責任の体系」として国家は生きつづけねばならぬであらう。昭和超国家主義の廃虚のなかで形成されるかの「日本型ファシズム国家」である。



4 月号

1975 / No.37

特集 日本は「台湾」で何をしたか

血塗られた歴史—総督府の「匪徒」討伐

安平軍夫の墓—強制連行の記録

山地族の傷跡—「中村輝夫」の周辺

編集部

降旗陽一

河田 寧

人、われを農本主義者という

ある愛郷塾生の歩んだ道

沖山通章

何よりだめな右翼

いまや政財界の「奥の院」—(記者クラブ)批判

火野本人

フリージャーナリストの会

5 月号

1975 / No.38

統一地方選挙と〈第三勢力〉の形成

〈地方〉問題にみる今日的危機

咲谷 漢

「洞穴時代」—日本共産党は…

昭和20年代—ある地方活動家の証言

吉川孝夫

「現人神」とその巫祝の復活

「28年ぶりの儀式」が意味するもの

浦戸明夫

『医学としての水俣病』シナリオ・第1部

—資料・証言篇—

土本典昭

〈日立〉ものがたり〈第1回〉

益田公一

6 月号

1975 / No.39

裁判官の“アイヒマン性”〈上〉

〈狭山裁判〉理解のために

青木英五郎

語られなかった常東農民運動

ある〈敗北者〉の回想と私的総括

市村一衛

●資料 常東農民組合小史

アダ花としての「地方文化」

“コミュニスト”は〈郷土史家〉に変身しえたか？

座談会

『医学としての水俣病』シナリオ・第2部

—病理・病像篇—

土本典昭



松本礼二 責任編集

遠方から

1975年6月10日発行

第3号

発行者 松本礼二

編集者 「遠方から」編集委員会

発行所 神奈川県川崎市幸区
河原町団地3-218
松本礼二事務所

電話 (044)555-3078

定価 600円